

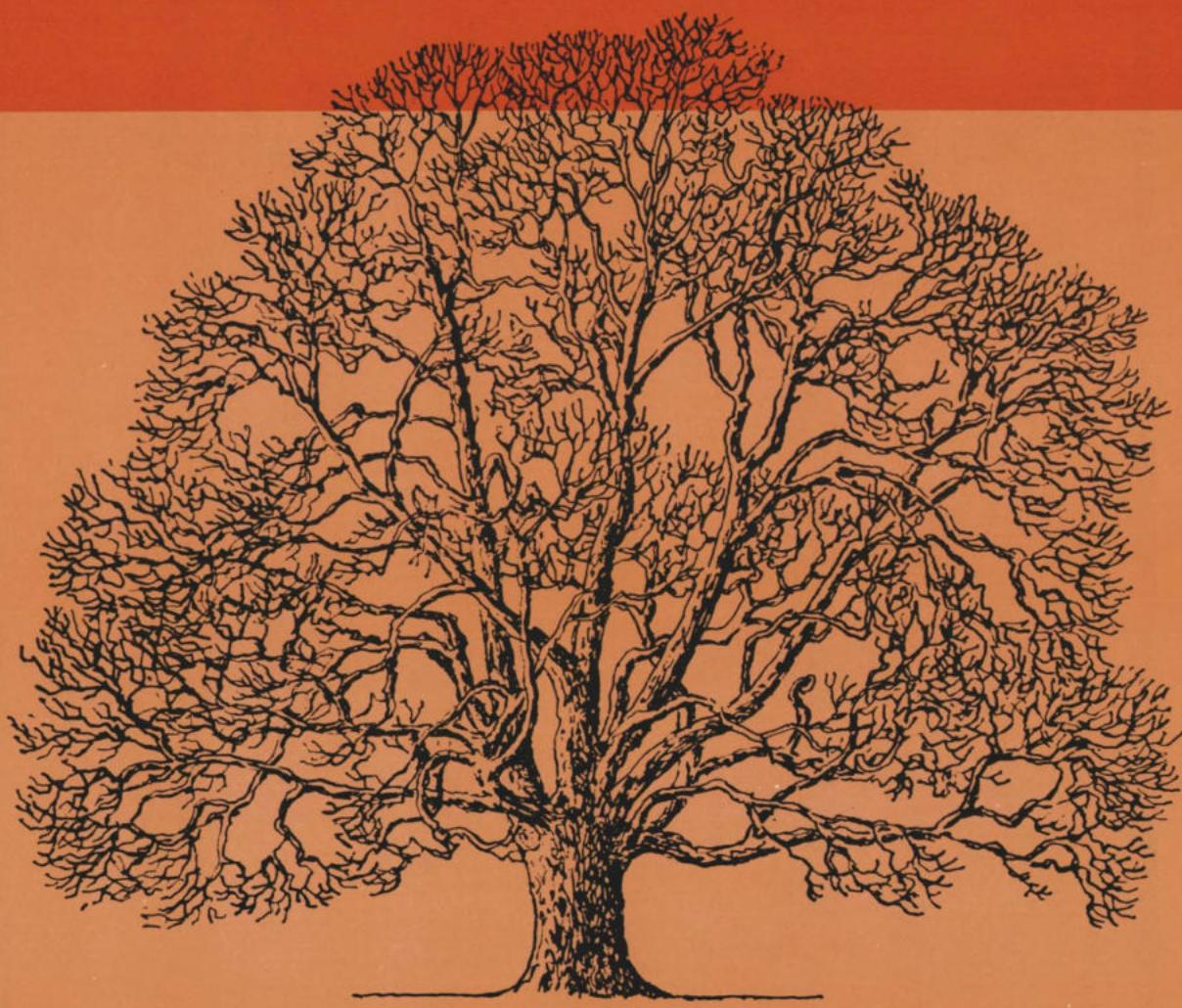
NO. 59
AUTUMN
1977

英語展望

ELEC BULLETIN

否定の論理と意味 太田 朗

Understanding Spoken English

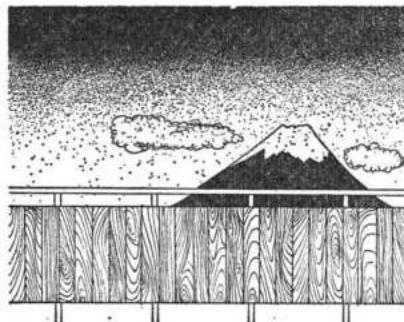


英語展望

NO. 59
AUTUMN
1977

ELEC BULLETIN

Edited by Fumio Nakajima
The English Language Education Council, Inc.
3-8, Jimbocho, Kanda, Chiyoda-ku, Tokyo



【国際展望】

在外研究での体験から.....	稻垣忠彦	2
南半球への旅.....	宮本昭三郎	4
否定の論理と意味.....	太田 朗	6
退いて内を固める.....	國弘正雄	22
Understanding Spoken English	Gretchen E. Weed	25
バラッドの世界（その9）.....	平野敬一	31
英語の諺（その7）.....	戸田 豊	36

【Forum】

The Japanese Ideology	海江田進	42
-----------------------------	------	----

【新刊書評】

『英語教育展望』.....	庭瀬利男	45
『英語学と英語教育をめぐって』.....	一色マサ子	47
新刊紹介.....		48
新刊案内.....		50
展望通信.....		51

表紙デザイン

太田英男



在外研究での体験から

INAGAKI TADAHIKO
稻垣忠彦

1974年7月から1年間，在外研究の機会を得た。私ははじめての海外生活である。小学校1年生と3年生の息子づれで、オハイオ州オバリンに滞在した。子どもを通してみた学校の実態、町の教育改革の経過、オープン・スクールの実際、その後たずねた英国での見聞などは『アメリカ教育通信一大きな国の小さな町から一』で報告した。ここでは私自身の、その1年間の英語体験を中心報告することにしたい。

1932年生まれである。ということは英語が「敵国語」であった時期が英語学習のスタートであったことを意味する。それ以後もごく普通の、訳読と文法中心の英語教育をうけ、direct method や oral method にはふれることなくすごしてきた。専攻は日本の教育方法史である。外国語には文献のうえでふれる機会や、ときおり小説をよむことはあっても会話を意識的に学んだことはない。そのような状態での出発であった。

× × ×

Pan Am のりこんで、機内のアナウンスを聞いたとたんに、心細くなった。米人の友人もあり、ときおり来訪する外人と話す機会もあり、ききとりに若干の自信はあったのだがアナウンスがききとれない。日本にいる外人は日本人むけにゆっくりと話す場合が多く、日本研究者の場合はこれまでの接触をとおして、日本人の英語のクセをのみこんでの対応になる。あれは特殊な英語だということを思いしらされたのである。それ以後、普通のスピードになれるのに4か月はかかるだろうか。ペイスにしたオバリン大学では研究室を提供され、自由に講義に出席し、ときおり講義や報告をするという有難い条件で過ごしたのだが、耳ならしにいくつかの講義にでることによって、pick up できる部分が少しずつふえていった。

日本をでて3か月目に、息子たちが大学の Speech Clinic で発音の訓練をうけることになった。日本人の留学生が3人いて、その一人ずつに言語学専攻の学生がついて発音の矯正をするのだが、そのモデルとして、発音

学の教授が息子たちを指導し、それを学生たちが参考にするということであった。この機会に私も発音をなおそうとしたのだが、2人の息子が2、3週間で習得したのに対して、私は音の識別もできず、あきらめるということになってしまった。40年間の条件づけのかたさをおもいしらされるとともに、そのころはじめた講義や報告で、我流の発音も結構通用するということにいなおって、それでとおすことにしたのである。

私の発音の欠点を自分なりに納得するためのいい機会が、11月の音楽教育の workshop であった。Conservatory の主催で、ロサンゼルスに研究所をもつ Mary Helen Richards の Education Through Music の workshop である。

以前から関心をもっていたコダイの系譜のものであること、教師の現職教育の場でもあるということから参加した。music game の実習が中心で、その間に理論的な討議がはさまれる。最初に30人ずつのグループにわかれ輪になって自己紹介がはじまる。“Ticky ticky bambaly, please say your name to me!” にこたえて、一人ずつ名前をいう。その名前の syllables を手拍子でなぞり、次々に名前をつないで歌をつくる。これをくりかえしながら、とくに syllables と手拍子との対応によって、名前や数の発音が英語としてできるようになった。

music game は音楽教育であると同時に言語の教育である。ことばと歌とリズムと身体のうごきが結びついており、つねに手拍子をうつたり身体をうごかすことによって、syllables や intonation がのみこめてくる。これらは中学のときにならったことにちがいはないのだが、music game では具体的な場面で、相互に結びついているので自然に体得し、ことばが生きるのである。私にとって、この workshop は、発音や intonation をなおすいい機会だった。それ以後は、話すとき、指先など身体のどこかをうごかして話すことを意識的にするようになった。また、music game により、ききよりも syllables やリズムにそってできるようになってきた。たと

えば、Thanksgiving は、私にとってはそれまではサンクスギビングか、受験でおぼえた T-H-A-N-K-S...といったスペリングなのだが、Thánks-giv-ing と syllables のまとまりでイメージできるようになってきた。

music game の効果がさらにはっきりしているのは息子たちである。2人とも music game をとりいれた音楽教育をうけており、次男は音素とスペリングを結びつけた phonics の指導をうけていた。次男は新しい単語も自由によめるし、いまでは2人とも Simon や Denver'さらには Jesus Christ Superstar などのレコードを2, 3度きくと、あわせてうたっている。私にはいぜんとして、わずかしかききとれないものがあるが…。

× × ×

スピーチや講義などの内容的表現の問題にうつる。

滞在した大学でのゼミの報告や講義からはじめたのだが半年をすぎてからは近くの州の大学や研究所で講演する機会があった。内容は日本での教育方法研究や教育の歴史、また私が助言者となっている長野県教育史の仕事などであった。教育方法、とくに授業の研究については持参した日本の学校のスライドや、子どもの作品(美術)を示しながら、どのような指導がおこなわれ、授業でどのような変化がおきたかを実践に即して具体的に話すようにした。教育史の場合は一時間あまり話し、あとは討議というのが普通だった。どうにかまがりなりにもこれらをこなせたのは、何よりも自分の専攻についての講演であり、私自身が話したい内容をもち、その内容を聴衆が知りたいこととして、積極的な関心を抱いていたということによるものだと思う。自分の土俵ということが有利な条件だったと思う。

ほぼ同じ頃に留学していた友人の場合、専攻が西洋史ということもあり、また大学院に入ったということもあるって、もっぱらむこうの土俵での研究であったため受身のつらさ苦しさを話していたが、私の場合、日本の教育方法史専攻という条件が表現を支える有利な条件になったと思う。もっともこれは、在外研究の成果如何とは別の問題である。

このほか、自分の英語が相手に通じるという自信をつよめてくれたものは、小・中・高校でやった授業だった。小学校1年から、高校まで30回ばかり日本についての授業をした。それは学校に入りこみ、教室になじむための有効なたてがかりであった。名前を漢字、かたかな、ひらがなで書いて自己紹介をはじめる。文字をがかりにして、中国と日本との歴史的文化的つながりを話し、あとはその時々によって欧米との交流、言葉の比較、日本の歴史、現在の日本の問題など、テーマはさまざまであ

った。私のたどたどしい授業を子どもたちは集中してきてくれた。ある学校では1時間以上集中してきていた子どもに、先生がこれまでになかったこととおどろいていた。私は、これは、私の英語がまずいため、子ども自身がそれを補ってきかなければならず、それが集中の秘密だったと思っている。と同時に、むこうの知りたいことを話せば、聞き手はそれをとらえてくれるといった信念めいたものがつくられてきた。

これから在外研究にでかける友人にアドバイスをもとめられる時、私は、自分が本当にしゃべりたいテーマをいくつか準備して話す機会を積極的につくること、そして、学校を訪ねて授業をすることをすすめることにしている。それは自信をつける有効な方法であり、また相互交流のためにも大切なことだと思う。

× × ×

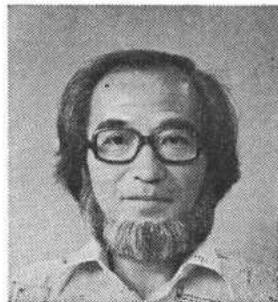
以上は私なりの体験である。ここから一般的な提言をするのはおこがましいことであろう。また、私のうけた英語教育と今日のそれとは大きく変化していると思う。しかし一面、受験中心の英語学習が、私のような英語を依然として再生産しているのではないかという懸念をもつてあり、次のような提案は許されるかもしれない。

一つは、英語の学習の出発点において music game や phonics の指導が参考になるのではないかということである。言葉をリズム、動き、場面と結びつけ、くりかえしと変化をもたせて教える music game はそれ自体たのしいものであると思うし、また music game そのものでなくとも、教材に歌をたくさんとりいれ、音楽教育と英語教育を結びつけ、とくにリズムをいかして発音を指導することは有効ではないだろうか。また、次男のうけた phonics の指導は、1年間で spelling word としての練習は100語ていどのものであるが、その効果は目をみはるものがあった。

第二は、自分が話したいこと、自信をもって表現できること、さらに表現したいことをしゃにむに話させる、まちがいの許容度を大きくして表現する機会をつくることである。完全主義ではなく、わずかな手掛けかりでも人間として communicate できるという体験を基礎にして学習をつみ重ねることが必要だと思う。Hello, Yes, No, という言葉一つの中に多様な気持や内容がこめられ、表現できる。そのような言葉の本質を起点とし、次第に表現を洗練していく指導の体系が必要ではないだろうか。

考えてみると、これらのこととは母国語の教育においても共通のことである。英語、日本語という区別をこえて、言葉の教育の基本の問題ということだろうか。

(東京大学助教授)



南半球への旅

MIYAMOTO SHŌZABURŌ
宮本 昭三郎

すいている夜汽車の車内には、なにかものがなしい空気が漂っているが、それは、香港で乗ったこの巨大なジャンボ機でもおなじであった。数すくない乗客のほとんどは、久しぶりで生まれ故郷を訪れ、またオーストラリアへ帰る英國人らしく、まぎれもないロンドンの雰囲気を私に感じさせた。だが、彼らの表情がさえていなかつたのは、20時間をこえる南廻りの旅のせいだったのか、それとも、チームズのほとりにふたたび立つのはいつのことかと、はや胸いたむ思いにとりつかれていたためであろうか。

英語の文化のいくつかの流れのひとつは、大西洋をわたって北アメリカで新しい成長をとげ、ハワイにまで達した。またひとつは、地球を大きくまわって、オーストラリア、ニュージーランドなど、南半球の大陸や、島々にまでのびていった。23年前、私が西欧への旅路の第一歩を印したところは、その流れの言わば終着点のひとつであるハワイであった。私は、その流れをさかのぼって、源泉地である英國で、13年の歳月をすごした。そしてこんどは、もうひとつの終着点であるタスマニア、いってみれば英語文化圏のさいはての島へおもむくわけであった。

目がさめると、飛行機は、いつしかオーストラリア大陸を、北から東へとななめに横切ってしまったらしく、荒漠とした水平線のかなたから、南太平洋の陽がのぼりかけていた。右手にかぎりなくひろがる大陸の地表。この大きさの感覚は、もう18年もまえに、はじめてサンフランシスコからニューヨークへ、古ぼけたコンステレーション機で飛んだときに味わったものだった。

事実オーストラリアは、アメリカとほぼ同じ大きさをもっている。だがひとつちがうのは、日本の22倍もあるこの広大な土地に、1,300万人しか住んでいないということだった。もちろん砂漠のように、居住に適していない地域があるとしても、1平方キロあたりの人口密度が1.7人という数字は、私たち日本人にとっては、実感を

ともなわない稀薄さだと言ってよからう。

オーストラリアの植民は、アメリカより170年ばかりおくれてはじまっているから、未開発の土地や資源がおおい。と言うよりも開発された部分はまだわずかだと言うほうが正しいのであろう。してみると、良質の労働力と技術の供給があれば、オーストラリアは、21世紀までに、飛躍的な発展をとげることはまちがいあるまい。そのとき、アメリカよりもアングロ・サクソンの色彩がはるかに濃いオーストラリアの社会と文化がどう変わるかが興味ぶかい問題であろう。このオーストラリアとアメリカとの対比は、シドニーにおり立ってからも、ずっと私の頭につきまとった。

シドニーは、私にとって錯覚をおこさせる町だった。世界一周航路の大きな客船が、そのクリーム色の船体を横たえている埠頭のちかくのキャフェーなどでは、イタリーやギリシア語しかきこえず、かつて歩いたニューヨークの裏通りが、私の記憶によみがえった。かと思うと、ビル街のまんなかに残る小さな広場は、英國の地方都市によく見られる昔ながらのマーケット・プレイスであった。道行く人たちも、ジーンズに裸足という無難作なかっこから、ひと目で英國人と知れる服装の人たちまで、対照的な身なりが私の目にとまった。つまり、荒けすりな感覚は、どちらかといえばアメリカ的であったし、伝統の歩みを感じさせるものは、もちろん英國の遺産であった。

アメリカは、歴史をつくりだそうと努力しているように私は感じたのであったが、ここではそういう傾向は見あたらないようだった。はやくから、英國のみならずヨーロッパ各国からの移民も數おおかったアメリカでは、おそらく自らのアイデンティティを必要としたのであろう。それにくらべて、オーストラリアは、純然たる英國の植民地であったから、とくに自分の歴史をつくりだす必要はなかったのではないか。言ってみれば、歴史は英本国がしゃっていってくれたわけである。もちろんオーストラリア生まれの人間がふえるにしたがって、オ

ストラリア人としての自覚も生まれてきた。しかし、それはずっとのちのことであった。

南緯43度前後にあるタスマニアは、四国と九州をあわせたくらいの大きさをもっているが、日本から見れば、たしかにさいはての島だった。私は、首都ホバートにある州立大学が、新しく設置しようとしている日本研究科の主任に内定していたので、大学関係者と協議するために、同地を訪れるところだったが、日本人たちのおおくは、その名も知らなかつたし、知っていた人たちも、私がそこへ行くと聞いて、けげんな顔をした。だが私自身は、タスマニアでの生活に、いくつかの期待をかけていた。

ひとつはもちろん新しい学科をつくりあげていくことにやりがいを感じたからであるが、それとともに、私たちのような家族、つまり混血の家族にとって安住の地となるかも知れぬという期待もあった。日本では、毛色がすこしちがうということだけで、毎日のように、外人だ、アメリカ人が来たという声を聞かなければならなかつた。ひどいときは、近所の公園に遠足に来た幼稚園の一クラス全員が、子供を追いまわした。引率の先生は、なにも言わずに立っているだけだった。理由もなしに突然石を投げつけられることもあった。私たちにとって、「国際都市東京」という言葉ほど空々しく感じる言葉はなかったのである。

ダーウェント川の西岸にそびえる標高1,250メートルのウェリントン山を背にしたホバートは、さすがに静かな町だった。人口15万の市といつても、大きな建物は数えるほどしかなく、ちょっと歩けばすぐ閑静な住宅地が、川のほとりから山の手のほうにひろがつていた。タスマニアは、オーストラリアで2番目に古い植民地だったせいか、ホバートにも、19世紀英國の名残りをとどめている建物がおおく残つていた。

タスマニア大学は、学生数3,400という日本的な感覚から言えば至ってこじんまりとした総合大学だったが、高台に立つその近代的な校舎は、小規模の大学としてはうらやましいほどのゆとりと設備をもつていた。初めて大学を訪れた私は、教授たちをはじめ、大学の関係者に紹介され、いろいろと協議をしているうちに、南半球にいることが信じられなくなつて來た。教授たちのほとんどが英國人、あるいは英國の大学の出身者だったため、言葉づかいをはじめ、すべてが英國式だったからである。

だが一步そとの自然は、まぎれもなく南半球の世界で

あった。太陽は北空を通り、「南」という言葉は、ここでは寒さ、暗さを連想させ、河口にちかい岸の岩場には、ときたまベンギンがうちあげられるのだった。だが、私をもっと驚かせたのは、夜の星空だったと言ってよい。天頂ちかく輝く南十字星や、マゼラン雲などは、少年のころからのあこがれをみたしてくれたのだったが、見なれた北半球の星を求めて、北空に目をうつした私は、オリオンの巨人がさかさまになっているのに気がついてがく然とした。それは、吐き気をもよおすような、異様な現象であったと言っても誇張ではなかった。

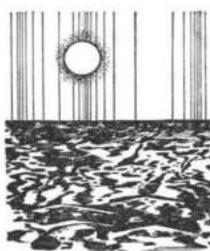
「はるか南の波濤のうえに…オライオンはかかれり」とうたつたのは、たしかシェリーであった。むかしから星は、各民族の文学のなかでとりあげられてきた。英文学はもちろんのことである。しかし、考えてみると、これらの文学は、いずれも北半球の文学であった。南北問題は、政治経済の分野のみならず、ひろく文化の面においても存在すると言つても過言ではあるまい。世界の文化活動は、これまで北半球の文化がリードしてきたが、やがて南半球独得の文化が生まれることであろう。すでにそのきざしは、英國、あるいはヨーロッパの影響から脱却しようとするオーストラリア文化人の努力に見られるのである。

それにしても、東京やシドニーとくらべると、ホバートはさびしい町だった。私の子供は、「ここには銀座がないね」と形容した。豊島園や数おおくの娯楽施設になれている子供たちにとっては、まったくの僻地であったにちがいない。だが、東京では買えないものが、ここにはあった。それはなんと言つても、まだ人間のにおいがしない自然であった。

私たちは休暇になると、車で5時間ばかりのところにある山小屋式のホテルへよくでかけた。すんだ入江を前に、赤い色の岩山を背にしていくつか立つているバンガローには、電灯はついたが、水道はなく、ためてある雨水をわかしてコーヒーをいれるといったところだった。夕暮になると、まわりのユーカリの茂みから、カンガルーーやボッサムなどの動物が集まつてきて、えさをあさつた。唯一の娯楽といえば、夕食後、コーヒーをのみながら、みんなで合唱するといった簡素な休暇は、マンモスプールで泳ぐのとはまったく異質のものだったから、最初は不便さだけが目立つたが、その良さは子供たちにもわかつたと見え、のちには、また行こうよとせがむようになった。

私が家族をタスマニアに連れて行った理由のひとつは、大都市の消費生活だけに馴れている子供たちに、素

(p. 21へづづく)



否定の論理と意味*

OTA AKIRA

太田 朗

1. 序

否定は、英語の文法、意味論のほとんどあらゆる部分に關係するが、本稿では、否定と数量詞、頻度の副詞との意味解釈の面でのからみ合いの問題をとりあげる。§2で否定と数量詞との關係、§3で否定と頻度の副詞との關係をとりあげ、それをもとにして§4で推論の規則及び会話の含意の問題をとりあげる。

§2及び§3でとりあげた問題は、いわゆる生成意味論者と解釈意味論者の対立点の一つをなし、その視点から多くの学者によりとりあげられて來たが、そのような理論上の対立を論ずるのが本稿の目的ではない。以下に述べることは、どのような理論上の立場をとるにしても共通の問題となるような事實を私なりにまとめたものであり、そしてこのよきな知識は、英語教育に携わるものにとっても何がしかの役に立つものであろうと信ずる。

限られた紙面で論ずる必要上、次の3つの点で問題を限定することにする。

- 統語論は省く。つまりどうやってその文が統語的に派生されたかの説明はしない。意味解釈は表層構造をもとにして行なうものとする。
- 原則として、單文の平叙文に考察の範囲を限定する。疑問文、命令文とか複文とかに範囲を広げれば、また色々の問題が出て来るが、しかしそれらの問題を考察する際にも單文の平叙文についての考察が基礎になるからである。
- 原則としてノーマルな文強勢をもった文に考察の範囲を限定する。ここでノーマルな文強勢というのは、大ざっぱにいえば、その文で強勢をうける語の中で最後の語が文強勢をうけた場合をいう。この点については、拙稿「焦点と前提」『英語展望』No.44 (1974), p.45 (太田 朗 1977, p.170) 参照。

ノーマルでない位置に文強勢が来ると、これから述べることでは律し切れない現象が出て来る。たとえば、1の文は、ノーマルな文強勢の場合で「私が解決した問題

は多くない」という普通の意味になるが、2のように many に特別な対比的強勢をおくと、「解決した問題は多いどころではない。すべてだ」というような特殊な意味に使われる可能性がある。

- I didn't solve many of the problems.
- I didn't solve *mány* of the problems. I solved all of them.

特殊な位置に文強勢をおくと特別な意味が出てくるのは、上述のような数量詞に限らない。たとえば、程度を示す表現の中で、somewhat, rather, pretty (かなり), fairly などは、very, utterly などと異なり、ノーマルな場合には否定の影響をうけることはない。たとえば He isn't very old といえば、「(多少は年とっているかも知れないが) そんなに年よりではない」という意味で not は very にかかっているといえる。しかし somewhat を含む否定文は 3 に示すように somewhat に特殊な対比的文強勢をおいて特殊な意味で用いる以外は余り使えない。

- John isn't *só*mewhat smarter than Bill. He is *múch* smarter.

2, 3 のような文が使われる典型的な場合は、相手が Did you solve many of the problems? とか、John is somewhat smarter than Bill とかいったのをうけて、それを訂正するような場合であって、echo question (問い合わせ) にあわせてこれを echo negation と呼ぶことができよう¹⁾。

Echo negation は、数量詞や程度をあらわす表現に伴

* 本稿は1977年3月19日東京教育大学における最終講義として、「大塚英語学談話会」で3時間間にわたって話した内容の一部をなるべくやさしく、書いたものである。その時、話した残りの部分は、'Time adverbials and conversational implicature' と題して、*Sophia Linguistica* No. 3 (1977, The Graduate School of Languages and Linguistics, Sophia University) に英語で発表してある。

資料を検討して下さった James Foard, Thomas M. Milward, Richard Moores, John Nissel 諸先生に感謝する。

1) Echo question については、太田「疑問文 I」『英語展望』No. 52 (1976), pp. 20-1 (太田 1977, pp. 193-194) 参照。

ってあらわれるだけでなく、色々な場合に用いられて、ノーマルな否定と異なった意味解釈を必要とする。次に happen, manage という含意動詞を例にとってこのことを説明する。4 の a, b の文は、それぞれ 4' の a, b の文を含意し、5 の a, b の文は、それぞれ 5' の a, b の文を含意するといわれる。p という文が q という文を含意する ('p|-q' とあらわす) というのは、p が真なら q も必ず真になるということである。

- 4. a. John happened to succeed.
b. John didn't happen to succeed.
- 4'. a. John succeeded.
b. John didn't succeed.
- 5. a. John managed to pass the exam.
b. John didn't manage to pass the exam.
- 5'. a. John passed the exam.
b. John didn't pass the exam.

つまり John happened to succeed と John succeeded とは一方が真なら他方も必ず真になり、一方が偽なら他方も必ず偽になるということになり、真理価値を同じくする。John managed to pass the exam と John passed the exam についても同じことがいえる。それでは、これら一対の文の意味の違いはどこにあるか。4a の文は John の成功が偶然に起ったものであり、5a の文は John が試験にパスしようと努めた、あるいは、試験が容易なものでなかったという意味を含み、これらの意味を含む、4'a や 5'a には特別に含まれていない。これらの意味を含む、4a や 5a の文で話者が伝えようと思っている意味ではなく、4b や 5b のように否定になってしまって失なわれない。これらの意味を含むのがそれらの文のもつ前提 (Presupposition) であるといわれるのはそのためである²⁾。

しかしこのことは、4, 5 のようにノーマルな文強勢をうけた場合にいえることで、happen や manage に特別な対比的強勢において echo negation のような場面で用いられる時は、上述の前提が否定されることがある。6, 7 はそうした場合である。

- 6. John didn't happen to succeed. He cheated.
- 7. John didn't manage to pass the exam. It was very easy.

要するに echo negation のような特殊な否定の使い方は、それだけまとめて扱う必要があるので、以下では、原則としてノーマルな文強勢をもったノーマルな場合をとりあげることにする。

2. 否定と数量詞

2.1. 数量詞の分類

数量詞は色々の観点から分類できるが、当面の目的のためには、次の 2 つの観点からの分類が必要である。

a. 全称的 (Universal) 対存在的 (Existential).

全称的というのは「あらゆる、すべての」の意味をもつもの、すなわちある集合のすべてのメンバーを指す役割をもつもので、all, every, each, both である。both はその集合が 2 つのメンバーから成る時に用いる。存在的というのは、全称的以外の数量詞で多少にかかわらず、ある数量の存在を示す。many, much, a lot of, a few, a little, 数詞などである。全称的を代表して示すために V, 存在的を代表して示すために E という、論理学で普通用いられている記号を借用することにする。論理学の量記号 (quantifier) は V, E だけで、英語では all, every が V に、some が E に最も近いが、それ以外に上述のように色々の数量詞があり、これらは単に「全称」「存在」以外にそれぞれ特有の意味をもっている。「代表して」といったのは、特有の意味でなく、共通にもっている意味に着目して V と E とに分類したことである。

b. [+SM] 対 [-SM]

数量詞の中には、否定文の中で否定の影響をうけるものと、うけないものとある。たとえば 8 の文は 8' のようにバラフレーズでき、many は not の影響をうけているが、9 は 9' のバラフレーズが示すように several は not の影響をうけない。8 は「私が読んだ本は多くない」の意味で、9 は「私が読まなかつた本が数冊ある」の意味である。

- 8. I haven't read many books.
 - 8'. There aren't many books that I have read.
 - 9. I haven't read several books.
 - 9'. There are several books that I haven't read.
- several のような数量詞は、9' のように not の右に出で来ても、その作用をうけない。このような数量詞を [+SM] とあらわし、8 の many のように否定の作用をうけるものを [-SM] と示すことにする。SM というのは some になぞらえて私が作った記号で、some が否定の作用をうけない数量詞の代表的なものと考えられるからである。some は否定文、if-clause、疑問文などで any にとってかわられるという説明がよくされるが

2) 前提については、太田 朗「前提」『英語展望』No. 45 (1974), pp. 32 ff, 太田 1977, pp. 172-179 参照。

some は否定文にもあらわれてその場合否定の影響をうけない。No one has found any solutions to some of these problems (誰もこれらの問題のあるものに対しては、なんらの解決も発見していない) では、any も some もともに否定とともにあらわれて、そして意味が異なっている。そしてこの文は No one has found any solutions to any of these problems (誰もこれらの問題のどれに対しても、なんらの解決も発見していない) とは意味が異なる。[+SM], [-SM] とは some 的であるか否かということをあらわす記号である。

表1は、[+SM] であるか [-SM] であるか、V であるか E であるかという2つの観点からの数量詞の分類である。

表 1.

	[−SM]	[+SM]
V	all, every, both	each (?)
E	many, much, a dozen, a great many, a lot of, a good deal of, N	some, a few, a little, a couple of, several, most, a number of, plenty of, at least N, at most N, 定決定詞のついた表現 (those many boys など)

- 注 1. at [least] N の N は任意の数詞をあらわす。
- 注 2. few は not many と, little は not much と同じ意味と考える。
- 注 3. any の問題は複雑でそれだけ別にとりあげる必要があるので、ここでは特別にはふれない。
- 注 4. each は [+SM] という人がいるが、はっきり分らない。
- 注 5. [+SM] の欄にある定決定詞 (Definite determiner) というのは, the, this/these, that/those, my, John's など所有格をいうが、これらが数量詞の前に来ると、否定の作用は数量詞に及ばない。たとえば I haven't talked with many children といえば, There aren't many children I have talked with と同じように not は many にかかりうるが, I haven't talked with John's many children といえば, not は John's に妨げられて many にはかかれないと。

2.2. ~Q と Q~.

[−SM] の数量詞でも、それが否定辞の左にあらわれる時はその作用をうけないのが普通である³⁾。10 は 10' のようにパラフレーズできる。

10. Many people didn't attend the meeting.
- 10'. There are many people who didn't attend the meeting.

§2b で、「several のような数量詞は...not の右に出で来てもその作用をうけない」といったのはこのためで、not の左にあれば [−SM] の数量詞でも否定の作

用をうけない方が普通だからである。存在的数量詞が意味上否定の作用をうける時これを～E とあらわし、うけない時これを E～ とあらわすことにする。～は否定を示すために論理学でよく使われる記号であり、～E で否定の作用をうける時をあらわすのは、表層で not, no, nothing, nobody, never などが存在数量詞の左にある時は、数量詞が否定の作用をうけるのが普通だからであり、E～で否定の作用をうけない場合をあらわすのも同様の趣旨からである。(ただし not などが数量詞に先行していても、その間に音調の切れ目が存在するような場合は、むしろ E～の解釈の方が普通になる。) 例文 8, 9, 10 はそれぞれ ~ many, several ~, many ~ という意味表示になる。

全称的数量詞は、not などがその左にある場合はもとより、not などが右にある場合でも～V の解釈の方がむしろ普通である。All that glitters is not gold あるいは All is not gold that glitters は、Not all that glitters is gold と同じく～V の意味、すなわちいわゆる「部分否定」になる。ただし All とその後に来る not などとの間に音調の切れ目があると V～ の意味となる。

詳細はこれから述べるが、E と V とをまとめて Q (= Quantifier) であらわすと、意味上、～Q になるか Q～ になるかは、Q が [+SM] であるか [−SM] であるか、否定辞と数量詞との表層上の相対的位置、Q が V であるか E であるか、の3つの要因のからみ合いによるものと思われる。

表2は、表1で分類された各種数量詞が、表層での否定詞との相対的位置により、意味上～Q となるか Q～ となるかを示したもので、表の一番左の縦列が表層での not との相対的位置を示す。一は問題の数量詞の起る位置を示し、not と一緒に間の…はそこに任意の語句が介在しうることを示し、…の所にある縦線 (C と E にある) は、音調の切れ目の存在を示す。A は not very many, not many, not all のように not と数量詞とが隣接するか、あるいは very, too といったきわめて限られた特殊な語のみがその間に介在して、全体として一つの構成素をなすことを示したものである。第2縦列は [−SM] の全称的数量詞が A, B, C, D, E の表層の文脈で否定の作用をうけるかうけないかを示したものであり、以下第3, 第4の縦列も同様に解していただきたい。第2縦列の C, D, 第3縦列の B, C, D には、()に入れたのと入れないと二通りの解釈が与えら

3) これは存在的数量詞の場合である。全称的数量詞については後述。「普通である」というのは、稀ではあるが、G. Carden (1973) のように 10 のような場合でも many が not の作用をうけるという人もいるからである。

表 2.

	[-SM]		(+SM)
	V	E	E
A. not (very too) —	~V	~E	*
B. not ... —	~V	~E (E~)	E~
C. not ·· ·—	~A (A~)	E~ (~E)	E~
D. — ··· not	~A (A~)	E~ (~E)	E~
E. — ·· not	V~	E~	E~

れているが、これは()に入らない方が普通の解釈であるということを示す。[+SM] の A 列の * は、その位置に [+SM] は起らないことを示す。

表 2 の示すことは以下 §2.3 で実際の例文について検討するが、この表を見て気付くことは、V の方が E よりも否定の作用をうける文脈が多いということである。A の横列は必ず ~Q, E の横列は必ず Q~ の読みになるが、それを両極として A から E に行くに従って ~Q が Q~ に移行する。V では D まで ~V がより普通な解釈だが、E では、B までが ~E がより普通な解釈で、C 以後は E~ となる。()の中に入った読みについても同じ傾向が見られる。

2.3. 例文と問題点.

2.3.1 not all, not every, not (very) many など.

最初に A の横列の問題を扱うことにするが、これは次に見られるような場合で、すべて ~V もしくは ~E の意味となる。

11. Not all } (of the) students know the answer.
12. Not many }

13. Not every student knows the answer.

14. Not a great many people attended the party.

15. ? Not a lot of people attended the party⁴⁾.

16. Not {much
a great deal of } water was left.

たとえ表面上 not と many とが隣接してあらわれていても、次の 17 の場合は A の場合ではない。17 の but 以下は they have not read many French books の意

味で、not と many とは一つの構成素を成さず（この点はあとでもう一度検討する）、音調も上述 12 の not many とは異なる。更に 11—16 の場合は not のあとに [+SM] の数量詞は来られない（18）が⁵⁾、17 のような文脈では [+SM] の数量詞も自由に起る（19, 20）。

17. They have read many English books, but not many French books.

18. *Not {most
some} people attended the party.

19. They have solved a couple of the problems, but not most of them.

20. Some people understood what I said, but not some others.

一つの構成素をなすこれらの not many, not all などはそのあらわれる位置が限られている。11—16 はそれが主語の一部になっている場合だが、21, 22 がおかしくて、23, 24 がよいのはこれらの表現があらわれるのには、主語の位置に限定されると考えられるかも知れない（なおこの点については Postal 1974, pp. 94 ff. 参照。Langendoen 1970, p. 167 では 21 のような例をよしとしているが、このような人は稀である）。

21. ? John knows not many of his classmates.

22. ? Harry believes not many policemen to be corrupt.

23. Harry believes that not many policemen are corrupt.

24. I arranged for not many people to attend the meeting.

しかし 25, 26 は主語の位置でも not many がいけない場合を示す（there 構文の主語が何であるかは議論が分れるであろうが、25 の主語については疑問の余地はない）。

25. *Are not many (=few) policemen corrupt?

26. *Are there not many (=few) bars in Paris?

逆に主語でなくとも not many が用いられる場合がある。27a, b はともに 28 と同じ意味で「クリスマスが土曜日に当る年は多くない」の意味であるが、27a では

4) 文頭の ? は多少おかしな文ということを示す。

5) 表 2 の [+SM] の A 列が * となっているのはそのことを示す。

6) 27 の例は Klma (1964) から借りたものだが、Klma は 27 の否定は文否定で次の (i) の否定は構成素否定であることを示すためにこれらの例を使っている。(i) は「何年もたたないうちに、クリスマスは土曜日になるだろう」の意味である。Christmas と will の相対的位置について 27 と (i) を比較。(i) In not many years Christmas will fall on Saturday.

not many が副詞句の中に用いられている⁶⁾.

27. a. In not many years will Christmas fall on Saturday.
- b. Not in many years will Christmas fall on Saturday.
28. Christmas will not fall on Saturday in many years.

更に29のような文はおかしいとされているが、Bakerのような人はそれもOKだという(Postal 1974, p. 98注12)。斜字体は目的語である。

29. ? Not all the questions can I answer.

主語の位置に限定されるというのをやめて、節の最初の位置と限定したらどうかと思われるかも知れないが、そうすると30がOKなのは説明できない。

30. Probably not many students could pass the exam.

Not all, not many などがあらわれうる位置が限られていることは確かだが、その適確な限定はよく分っていない。23, 24のように補文標識 that や for が介在すればよいが、そうでなくて、not many や not all の前に動詞的要素が来るとおかしい文になるという限定が一番よさそうだが、ともかくこの問題はなお検討をする。

[+SM] が A 列の位置にあらわれると 18 の例文が示すように非文になるが、not a few people とか not a little water とかはよいではないかという疑問が出されるかも知れない。a few, a little は表1で [+SM] になっているからである。「少なからざる」の意味で not a few, not a little が用いられるのは事実だが、アメリカ英語では quite a few, quite a little がそのかわりによく用いられて、not a few, not a little を認めない人もいる。a few, a little を [+SM] としたのは、表1のBから下の文脈では、この2つの表現は否定の作用をうけないからであるが、not a few, not a little の否定の作用は Quirk et al., 1972, p. 379 がいうように一種の understatement をなす特殊な用法で、全体として熟語的なものと考えた方がよいと思う。

11の文が示すように not all は OK だが、not both はだめなようである(31)。

31. *Not both of the students could pass the exam.

'A or B but not both' というような時は OK になるが、この文脈は17, 19, 20に示したような文脈である。

2. 3. 2. not · () · V, V · () · not.

all, both, each には数量詞移動変形(Quantifier

floating) というのがあるといわれている。それは all of them went there から They all went there, Both of them are dead から They are both dead を出すような変形である。31の文が表現しようとしている意味は、both に数量詞移動変形をかけた32のような文で示す。勿論 all についても同様な文が可能である(33)。

32. Their parents aren't both dead.

33. We can't all do just as we like.

あとでもう一度検討するが、この not all, not both は表1のA列よりもB列のケースであると一応考える。not と all (もしくは both) とは一つの構成素をなさず、かつ間に他の語が介在できるからである (They aren't really both dead)。意味解釈はA列としてもB列としてもどちらも～V となる。

34は音調の切れ目を示す | があれば表1の C のケース、なければBのケースであるが、Cのケースでも～V が圧倒的に好まれる解釈である。

34. John couldn't solve (|) all of the problems.

35a は D のケースであるが、Carden 1973 はこのような例について詳細な研究をして、否定が数量詞にかかる b のような解釈をするタイプ(これを Neg Q dialect という)と、動詞句にかかる C のような解釈をするタイプ(Neg V dialect という)と、両方を許す混合型とがあることを指摘している。Jackendoff 1972 は all, both に強勢をおき、文尾を尻上りの音調でいうと b のような解釈になるという。私が当った資料提供者(informants)は、C のような意味で 35a を使うのは、ルースな話し言葉で、うっかり all of them と口にしてしまって、そのまま最後までつづけてしまったので、ちゃんと考えるゆとりのある書き言葉なら C のような意味なら C のようなあいまいでない文を使うといっている。この説明は面白いと思う。

35. a. All } of them don't think so.
Both }

- b. Not all of them think so.
They don't both think so.

- c. None } of them think so.
Neither }

なお36のような文は文法的かどうか疑わしい(特に both の場合)が、もしよいとすれば意味は V～であるというのが informants の意見である。

36. ? We { all } don't think so.
both }

37はいわゆる話題化変形(Topicalization)がかったケースだが、この場合も V～の意味になるという資料

提供者と、～VとV～との両方あるという資料提供者といふ。

37. All of those boys I don't like.

表1のD列は以上のようなことのまとめであるが、話題化変形のついでに38—40の例をつけ加えておく。38はV～、40は～Vの解釈となる（なお39と29を比較）。

38. (As for) all of those boys, I don't like them.

39. *(As for) not all of those boys, I like them.

40. (As for) those boys, I don't like all of them.

41は表1のE列のケースで、この例はKroch 1974から借用したものだが、V～の意味しかない。

41. All of the soldiers, when the captain mumbled, didn't hear the order. (=None of the soldiers, ..., heard the order).

2. 3. 3. not · (+) · Ǝ, Ǝ · (+) · not.

42—44は生成意味論と解釈意味論との論争の時よく引き合いに出される有名な例であるが、この論争自体をとりあげるのは本稿の目的ではない。

42. Not many of the arrows hit the target.

43. The target wasn't hit (+) by many of the arrows.

44. Many of the arrows didn't hit the target.

Jackendoff 1972は、43は42と同じく～many (=few)の意味で、従って44のもつmany～と意味が違うという。その理由として、45, 46はともに矛盾した(contradictory)発言になるが、47はそうでないからだという。

45. Not many of the arrows hit the target, but many did.

46. The target wasn't hit by many of the arrows, but it was hit by many of them.

47. Many of the arrows didn't hit the target, but many did.

しかしKatz 1972, pp. 438-9は43は42よりもむしろ44と同意味で、Jackendoffが46を矛盾と思い誤ったのは、butという接続詞を用いたからで、andを用いれば46が矛盾でないことがはっきりするであろうという。Kroch 1974は、46のような文はそもそも不細工で、48のような文はきわめて自然で、矛盾を含まない文であるという（この場合のmanyの対比強勢は太田がつけた）。

48. John couldn't solve many of the problems, but many of them he could.

もし43のような文で|で示したような音調の切れ目が

あれば、それは表2のCの場合で、many～がより普通の解釈であるが、たとえ音調の切れ目がないBのケースであろうとmany～も可能な解釈であり、従って事実の認定はJackendoffの方が分が悪い。

ちなみに47は矛盾のない文であるが、49は矛盾した文になる。

49. Most of the arrows didn't hit the target, but most did.

Most of the arrowsといえばその矢の集合の過半数を指すのだが、many of the arrowsについてはその集合の何パーセントと一律に決めるわけには行かない。20%くらいしか的にあたらないであろうと予期していく30%あたれば、Many of the arrows hit the targetというであろうから、どれだけの割合をmanyというかはケースバイケースで異なるからである。47が矛盾がなく、49が矛盾しているのは、49の場合には、同一の矢が同時に的にあたりそして当らないということになるからであり、47の場合には、的に当ると当らないのとは別の矢になりうるからである。

しかし45は矛盾している。45の前半は～many...といい、後半はmany...といっているからである。同様にI have read few booksとI have read many booksも矛盾している。fewは意味上～manyだからである。

50も表2ののケースで二通りに解せられるが、「読まなかった本が5冊もある」より「5冊もの本は読んでいない」の意味の方が普通である。

50. I haven't read as many as five books.

表1で[-SM]のƎとしてあげた表現を一々表2のBからEまでの文脈に入れて検討することは省略するが、manyを代表として上に述べたことは大体他の表現にもあてはまる。

ただ不定冠詞とoneのついた名詞句については若干の注意が必要である。表2のA列の位置にあらわれた51のような場合は勿論～Ǝで、「(一つも)ない」の意味となる。

51. Not {an}apple was eaten by John.

Jackendoff 1972は、不定冠詞のついた名詞が否定辞の右に来る表2のB列のようなケースでは、ほとんど間違いなく～Ǝとなるといっているが、52aのような例は～Ǝ(bのバラフレーズ)とƎ～(cのバラフレーズ)と二通りの解釈が可能である。

52. a. John didn't correct a typographical error.

b. John didn't correct any typographical er-

rors.

- c. There is a typographical error that John didn't correct.

更に53の斜字体の部分のように、不定冠詞のついた名詞句の内容が詳細になる程、否定の作用をうけなくなる（この例 Kroch より借用）。

53. John didn't love a woman whom his father wanted him to marry.

54の文が示すように B 列にあらわれた one は、もし特別な強勢をうけなければ \exists ～、強勢をうけると even one と同じく～ \exists の意味となる。

54. John didn't solve ^(c)one of the problems.

次の 55 は表 2 の D 列のケースだが、この場合は \exists ～の方が普通の解釈で、その時は one はよいが、不定冠詞は多少おかしい。

55. ?An^(c)apple wasn't eaten by John.
One}

56の例は、やはり D 列のケースだが、意味は～ \exists で、このような意味になるのは、available という述語のためである。

56. A .44 Caliber pistol wasn't available in the shop. (=No .44 caliber pistol was available...).

57 はいずれも [+SM] が not の右にあらわれた場合で、どれも \exists ～の意味となる。たとえば最初の文は There are a few books that John hasn't read の意味である。

57. John hasn't read $\left\{ \begin{array}{l} \text{a few} \\ \text{a couple of} \\ \text{several} \\ \text{at least three} \\ \text{those three} \end{array} \right\}$ books.

最後に同一文中に否定と 2 つの数量詞があらわれた 58 のケースをとりあげておく。

58. Not all of the students knew many of the answers.

Not all は必ず～V の意味となるので、V～となることはない。また～と V の間に他の数量詞が入る解釈を許さない。従って 58 は (i)～V many か (ii) many～V かどちらかで、V～many, ~many V の意味にはならない。(i) は Some of the students didn't know many of the answers と同じような意味で、(ii) はうまいバラフレーズではないが As for many of the answers, not all of the students knew them といった意味である。

3. 否定と頻度の副詞

3.1. 頻度の副詞の分類.

頻度を示す副詞 (Frequency Adverb. 以下 FAdv と略す) にも、否定の作用をうけるのと、うけないのとある。また V と \exists とある。表 3 は表 1 にならって、FAdv を分類したものである。

表 3.

	[−SM]	[+SM]
V	always, every time	whenever
\exists	often, frequently, N times (e.g. three times)	sometimes, occasionally, on several occasions, usually, generally, etc.

表 3 を見ると分るように、FAdv は、表 1 にあげた数量詞とかなりパラレルである。every time, N times, sometime, on several occasions は、それぞれそれに相当する数量詞 every, N, some, several と同じ所に所属している。always は at all times もしくは all the time, often, frequently は many times, occasionally は a few times, usually は most of the timeと考えれば、これらの所属も、それぞれ表 1 の all, many, a few, most の所属と同じ所であることが分かる。更に rarely, seldom は not many (=few) times, ever は at any time と考えうる。

often を many times, usually, generally を most of the time と考える一つの理由は、47, 49 の文の場合と同様 59, 60 の文は、59 が矛盾を含まず、60 が矛盾した文となるからである。most と同じく usually も過半数のケースということになる。

59. Often he doesn't take medicine, but often he does.

60. Usually he doesn't take medicine, but usually he does.

ちなみに 61 は矛盾した文となるが、このように not と often が隣接してあらわれると、45 の文の not many と同様、必ず～ \exists ... の意味となり、従って but 以下の \exists ... と矛盾することになる。

61. He doesn't often take medicine, but he often does.

3.2 例文と問題点.

FAdv を表 3 のように分類したのは、表 1 に示した数

量詞とかなりパラレルであるからである。つまり表1と表2をくらべ合わせれば否定辞と数量詞とのからみ合いによる意味解釈が分るように、表3と表2をくらべ合わせれば FAdv と否定辞とのからみ合いから生ずる意味解釈がおおよそ分る。

3.2.1. not always, not (very) often.

前節61の例文で見たように not と often, always が隣接してあらわれる時は、必ず ~always, ~often, つまり ~V_t, ~many_t の意味となる⁷⁾。このように not と always, (very) often が隣接してあらわれるのは、助動詞 (Aux) のあとか、文頭である (62, 63)。

62. He doesn't^{always}_{often} come home late.

63. Not^{always}_{often} does he come home late.

この場合を表2のA列のケースとするには、62の not と always, often は一つの構成素と考えられないという点で難点がある。B列のケースを考えると、62, 63の not often は必ず ~many の意味になり、many ~ の意味はないから具合が悪い。表2のB列は～E_tが好まれる読みであるが、～E_tも可能な解釈であるからである。そもそも表2のA列を not と数量詞が「一つの構成素をなす」というように規定したのは、11-16のような例を17, 19, 20のようなケースと区別するためであった。しかし62のような例を§1で扱った名詞にかかる数量詞と同じように表2で統一的に処理するためには、「一つの構成素をなす」という条件をはずし、そのかわり「not と数量詞の隣接が削除変形による結果でないケース」とした方がよいかも知れない。17, 19, 20は削除変形によりできたものと考えられるからである。もしこの考え方をとれば、32, 33のケースもB列でなくA列のケースと考えうる。この方が一般化がうまくできるので、一応 §2.3.1. の結論及び §2.3.2. の32, 33の説明を上述のように訂正した方がよいかも知れない。

3.2.2. not · () · V_t, V_t · () · not.

64はBのケースであるが、これは二通りに解釈できる。一つは～V_tの場合で「彼女は君がキスするといつも仕合せに感ずるとは限らない」という意味、もう一つはV_t～の場合で「彼女は君がキスすると何時もみじめな気分になる」という意味である。happy と every の間に音調の切れ目があると後者の意味が強くなり、every time 以下が前置された65のようになると後者の意味しかない。66はV_t～の意味しかない。表3で

whenever を [+SM] としたのはそのためである。

64. She isn't happy () every time you kiss her.

65. Every time you kiss her, she isn't happy.

66. She isn't happy whenever you kiss her.

67は§3.2.1. で述べたケースで～Vの意味しかない。

67. She isn't always happy when you kiss her.

all と異なり、always は表2のDの位置では非文法的となる(65)。

68. *He always^{} doesn't come home late.
*Always he^{}

3.2.3. not · () · E_t, E_t · () · not.

69は、たとえ town と very の間に音調の切れ目があっても、～very often の意味が圧倒的に強い。

69. Tom didn't go to town () very often.

70, 71は often ~ の場合、すなわち「…しないことが度々ある」の意味である(表2, EのD列)。

70. Very often Tom didn't go to town.

71. Tom^{often hasn't}_{has often not} paid taxes.

71は故意に税金を払わなかったようなケースによく用いられる。

72は [+SM] のケースで、従って E_t ~ の意味となる(表2 [+SM] の綴列)。

72. Tom didn't come home

sometimes.
occasionally.
on several occasions.
on those three occasions.

73は、全部同じ意味で usually, normally などが、あらわれる位置のいかんにかかわらず否定の影響をうけないことを示す。74も同様。usuallyなどを most of the time と考えれば、most は [+SM] だから、このことは説明がつく。

73. The jewel^{isn't usually}_{usually isn't}^{}_{is usually not} found in ordinary stores.

74. A: He doesn't usually speak from notes.

B: That's true. He usually doesn't.

表2で示したように [+SM] は A列では * である(cf.18)が、usually は、73の1行目の文が示すように

7) t は time を示す変項 (variable) で V や many は t を拘束 (bind) する数量詞と考える。たとえば He often comes home late は many_t (He comes home late at t) と考えられる。

その位置でも OK で、ただ意味が $\exists t \sim$ となるだけである。しかし他の [+SM] はその位置で * となる(75)。

75. *Tom didn't $\{\text{sometimes}\}$ speak from notes. $\{\text{occasionally}\}$

以上をまとめると多少の喰い違いはあるが、大筋において FAdv は §2 の数量詞とパラレルであり、表2はその両方に通用する。FAdv も広義の数量詞と考えてよいであろう。

3.3. 否定と数量詞と FAdv.

最後に否定と数量詞と FAdv とが同一文中にあらわされたケースを二、三検討しておこう。

76. a. Not all people are always happy.
b. Not always are all people happy.
c. All people are not always happy.

a は $\sim \forall x \forall t$ (x is happy at t) で $\sim \forall \dots$ は $\exists \sim \dots$ と同じだから、Some people are not always happy つまり There are some people who are sometimes unhappy と同じ意味になる。b は $\sim \forall t \forall x$ (x is happy at t) で、結局 There are some occasions when some people are unhappy と同じ意味になる。c は not が all にかかる解釈をとれば (Carden 1973 のいう Neg Q dialect), a と同義になり、not が動詞句にかかる解釈をとれば (Carden 1973 のいう Neg V dialect), 結局 Nobody is always happy と同じ意味になるが、この場合なら恐らく Nobody is always happy を使うであろうと思う。not always のあらわす $\sim \forall t$ が一塊で $\forall x$ をその勢力範囲内におさめていると解釈できれば c は b と同義になる筈であるが、この解釈はありそうにもない。

次は no (=not any) と frequently のからみ合いである。

77. a. No one got drunk frequently.
b. Frequently no one got drunk.
c. No one frequently got drunk.

a は $\sim \exists x$ many_t (x got drunk at t) で、There was no one who got drunk frequently とパラフレーズできる。b は many_t $\sim \exists x$ (x got drunk at t) で、There were many occasions when no one got drunk とパラフレーズできる。c は frequently の前後に切れ目でもあれば、b の解釈になるかも知れないが、そうでなければ a の方が普通の解釈である。

次は否定と many と [+SM] の FAdv のからみ合いである。

78. Many people didn't attend the meeting on

several occasions.

on several occasions は not の影響をうけないから、several_t \sim の解釈しかない。また many...not は many \sim の解釈が圧倒的に優勢である。ただ many_x と several_t との関連で、前者が後者の作用をうけるとすれば 79a のように、その逆なら 79b のように解釈される。

79. a. several_t many_x \sim (x attended the meeting at t).
b. many_x several_t \sim (x attended the meeting at t).

a は On several occasions many people didn't attend the meeting とパラフレーズでき、b は There were many people who didn't attend the meeting on several occasions とパラフレーズできる。

79. Not many people attended the meeting on several occasions.

Not many は必ず ~many と解釈されるから、79 は、80a, b のような二通りの解釈になる。

80. a. several_t \sim many_x (x attended the meeting at t).
b. ~many_x several_t (x attended the meeting at t).

a は On several occasions few people attended the meeting とパラフレーズでき、b は There weren't many (=few) people who attended the meeting on several occasions とパラフレーズできる。

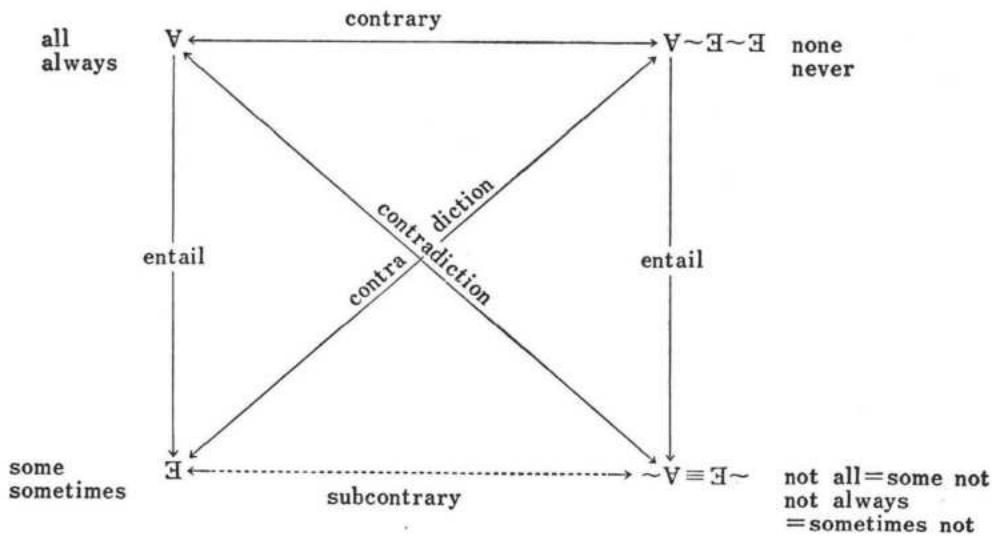
4. 推論の規則と会話の含意

4.1. 推論の規則 (Inference rules).

All people are happy といえば、Some people are happy は論理的に必然的に真となる。同様に None are happy といえば、Some people are not happy (=Not all people are happy) は論理的に必ず真となる。任意の発言 (statement) を p, q であらわすと、p が真なら q も論理的に必ず真になる時、p は q を論理的に含意する (entail) するといい、p \rightarrow q とあらわす。一般的に $\forall x (\dots x \dots) \vdash \exists x (\dots x \dots)$ 及び $\sim \exists x (\dots x \dots) \vdash \sim \exists x (\dots x \dots)$ あるいは $\forall x \sim (\dots x \dots) \vdash \sim \forall x (\dots x \dots)$ となる。

All people are happy と Not all people are happy (=Some people are not happy) とは、一方が真なら他方は必ず偽になる。このような関係を矛盾 (contradiction) という。同様に Some people are happy と

表 4.



None are happy とも矛盾する。一般的に $V_x (\dots x\dots)$ と $\sim V_x (\dots x\dots) = E_x \sim (\dots x\dots)$ とは矛盾し、 $E_x (\dots x\dots)$ と $\sim E_x (\dots x\dots) = V_x \sim (\dots x\dots)$ とは矛盾する。

All people are happy と None are happy (あるいはそれと同じ意味で Carden のいう Neg V 方言で用いられる All people are not happy) とは、両方とも真になることはあり得ないが、両方とも偽になることはありうる。このような関係を反対 (contrary) という。一般的に、 $V_x (\dots x\dots)$ と $V_x \sim (\dots x\dots) = \sim E_x (\dots x\dots)$ は反対になる。

同様に John is always happy は John is sometimes happy を論理的に含意し、John is always happy と John is not always happy (= John is sometimes not happy) とは矛盾の関係にあり、John is always happy と John is never happy とは反対の関係にある。

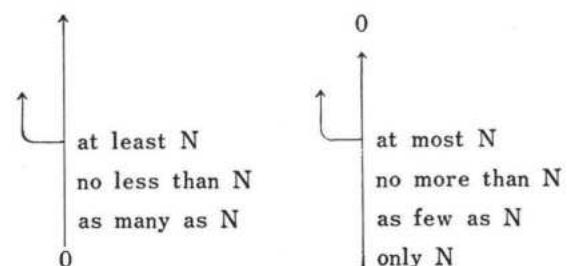
以上の関係を図示したのが表4である。

表4の点線で示した関係は未だ説明していないが、これは後述「会話の含意」の所で説明する。その前に肯定の尺度 (positive scale) と否定の尺度 (negative scale) のことについて述べておきたい。

表4の四角形の V から E に行く左の縦線は否定を含まない肯定の軸であり、右の $\sim E$ (もしくは $V \sim$) から $E \sim$ (もしくは $\sim V$) に行く縦軸は、否定の軸であるといえる。肯定の軸の V と E 、否定の軸の $\sim E$ と $\sim V$ とはいわばそれぞれの軸の極をなし、その極の中間の適当な所に肯定、否定をあらわす様々な表現が位置して、

肯定、否定の尺度を形成することになる。たとえば、most, a lot of, many, several, a few, a little などは肯定の軸に属し、not many, few, little などは否定の軸に属することになる。同様に often, frequently, sometimes, three times などは肯定の軸に、not often, rarely などは否定の軸に属することになる。

肯定の尺度、否定の尺度の関係で特に興味があるのは、at most N (N は任意の数詞), no more than N, only N, as few as N のグループと at least N, no less than N, as many as N のグループとで、前者は否定の尺度、後者は肯定の尺度に属するといえる。表5はこの関係を示したもので、左の縦線は 0 から無限大に向う軸、右の縦線は無限大から 0 に向う軸をあらわし、たとえば at least N は N から無限大の方向に向かう値を示し、at most N は逆に N から 0 の方向に向かう値を示している。表5の左の線は表4の肯定の尺度に相当し、右の線は表4の否定の尺度に相当するものである。No less than N と no more than (=only) N と表5。



は、ともに N と同じ数値を示すが、一方は肯定の尺度、一方は否定の尺度に属する。I have read no more than three books と I have read no less than three books とは同じく I have read three books ということを前提とするが、いわんとしていることは異なる。

これらの表現が肯定、否定の尺度に属するということは次のような 2 つの事実にあらわれている。

否定とともに特徴的にあらわれる表現を否定対極表現 (Negative polarity expression) ということは、拙稿「疑問文 (I)」『英語展望』No.52 (1976), p.18 (太田 1977, p.189) でふれたが³, lift a finger, can help -ing も否定対極表現で、81, 82 はそのことを示している。

81. a. John wouldn't lift a finger to help Mary.
(John は Mary を少しも助けようとしない)
b. John couldn't help crying.

82. a.*John would lift a finger to help Mary.
b.*John could help crying.

83, 84 は、否定の尺度をあらわす表現はこれらの否定対極表現とともに用いられるが、肯定の尺度をあらわす表現は用いられないことを示す。

83. $\left\{ \begin{array}{l} \text{No} \\ \text{Few} \\ \text{At most five} \\ \text{No more than five} \\ \text{Only five} \end{array} \right\}$ students in the class
would lift a finger to help Mary.
could help crying.

- 84.* $\left\{ \begin{array}{l} \text{A few} \\ \text{Some} \\ \text{At least five} \\ \text{No less than five} \end{array} \right\}$ students in the class
would lift a finger to help Mary.
could help crying.

肯定、否定の尺度の区別は、次のような推論の規則を考える場合にも必要である。Many girls are both attractive and intelligent といえば Many girls are attractive and many girls are intelligent ということが論理的に含意される。attractive で intelligent な女の子が多数いれば、attractive な女の子も多数おり、intelligent な女の子も多数いることは理の当然だからである。しかし Many girls are attractive and many girls are intelligent であるからといって必ずしも Many girls are both attractive and intelligent ということにはならない。attractive な女の子も多数おり、intelligent な女の子も多数いるからといって、両方かねそなえた女の子が多数いるとは限らないからである。

many という肯定の尺度の数量詞の場合は以上のように推論できるが、Not many (=few) という否定の尺度を示す数量詞の場合は、推論は逆になって、Few girls are attractive and few girls are intelligent \vdash Few girls are both attractive and intelligent となるが、その逆の Few girls are both attractive and intelligent \vdash Few girls are attractive and few girls are intelligent は成立しない。両方の論理的含意が成立するのは V の場合だけで、All girls are both attractive and intelligent \vdash All girls are attractive and all girls are intelligent もその逆も成立する。p \vdash q で q \vdash p である関係は p=q とあらわすが、All girls are both attractive and intelligent = All girls are attractive and all girls are intelligent である。

at least N, no less than N が肯定の尺度に、at most N, no more than N, only N が否定の尺度に属することは、85, 86 のような論理的含意は成立するが、その逆の含意は成立しないからである。

85. a. At least five girls are both attractive and intelligent \vdash At least five girls are attractive and at least five girls are intelligent.
b. At least five girls are neither attractive nor intelligent \vdash At least five girls are not attractive and at least five girls are not intelligent.
86. a. At most five girls are attractive and at most five girls are intelligent \vdash At most five girls are both attractive and intelligent.
b. At most five girls are not attractive and at most five girls are not intelligent \vdash At most five girls are neither attractive nor intelligent.

頻度の副詞についても同じような推論の規則が適用できる。87 は肯定の尺度、88 は否定の尺度の場合で、そこに示されている含意は成立するが、その逆の含意は成立しない。

87. a. John often sang and drank \vdash John often sang and John often drank.
b. John sang and drank at least five times \vdash John sang at least five times and John drank at least five times.
88. a. John rarely sang and John rarely drank \vdash John rarely sang and drank.
b. John sang at most five times and John

drank at most five times \vdash John sang and drank at most five times.

§4.1に例示したような推論の規則は、§2, §3で述べた意味解釈をもとにして、適用されるもので、意味論プロバーには入らないという人もいるが、興味のある問題である。特に肯定と否定の尺度は次節§4.2に述べる「会話の含意」にも関係するので、なおさらである。

4.2. 会話の含意 (Conversational implicature).

4.2.1. 論理的含意と会話の含意.

Three of John's five children are in elementary school という文は、John の5人の子供の中で小学校に行っているが2人もしくはそれ以下であれば偽になる。それでは4人もしくは5人全部が小学校に行っていたらこの文は真であろうか、偽であろうか。このような場合、Are three of John's five children in elementary school? と聞かれたら、Yes, Noどちらを答えるべきか、恐らくどちらも正しいであろう。そしてYesなら、それにつづけて In fact four of them are というような補足的説明をするであろうし、NoでもFour of them are といった補足的説明を加えるであろう。

論理的には、Three of John's five children are in elementary school は、4人以上の子供が小学校に行つていれば、勿論真である。しかし通例この文は、小学校に行っている子供は3人でそれ以上ではないというように理解される。これは論理上の真理価値の問題ではない。それは会話の含意によるものである。

会話の含意というのは、Paul Grice 1967 がいい出したもので、元来 Grice は \sim , $\&$, \vee , \exists という論理記号とそれに相当する not, and, or, if then という英語の表現との間に存在する意味上のギャップを説明するために、会話の含意ということをいい出したのである。たとえば p, q を任意の発言とすると、 $p \vee q$ は p, q のいずれか一方もしくは両方が真なら真、両方とも偽なら偽となるというのが論理学の規定する所で、 \vee の意味はそれだけのことである。しかしそれに相当する英語の or というのはそれだけの意味ではない。

89. My mother is either in the kitchen or in the bedroom.

89の文を聞くと、聴者は話者が母が台所か寝室かどちらにいるか分らないでいっているものと理解するであろう。もしどちらにいるか話者が知っているなら、My mother is in the kitchen とか、My mother is in the bedroom とかいうであろうと聴者は期待するからである。しかし論理的真理価値に関する限り、or で結

ばれたどちらか一方の文が真なら、全体は真なのだから、89は、or で結ばれたどちらか一方が真なら、真になるわけで、問題は真理価値の問題ではない。 \vee ない or のこのような意味は、従って論理の問題ではなく、それは会話に働く「協力の原則」によって説明できると Grice は考えた。ノーマルな会話では、その会話の目的達成のために話者と聴者の間に「協力の原則」が働く。Grice はこの原則を更にいくつかの maxim にわけているが、その詳しいことは当面の目的のために必要ないので省くとして、その中の一つに話者は聴者に「必要にして十分な情報を与える」というのがある。89は、My mother is in the kitchen もしくは My mother is in the bedroom どちらか一方をいうより情報量が少ない。従ってもし話者が母が台所か寝室かどちらにいるかを知っていれば、「十分な情報を与える」という原則に従って、89ではなく、My mother is in the kitchen とか My mother is in the bedroom とかいうであろうと聴者は期待する。逆にいえば89をいうのは、話者が協力の原則に従っているなら、話者は母がどちらにいるか知らないのであろうと聴者は推測する。 \vee ないこのような or の意味は、ノーマルな会話に働く協力の原則から生じた含意なのである。

このような会話の含意というのは、§4.1で述べた論理的含意 (entailment) と異なり、文脈場面により棚上げ (suspend) できる。復活祭の日に、色のついた卵をあちこちにかくして、子供達が探すという習慣があるが、卵をかくした当事者であるお母さんが、子供達に The next egg is either in the kitchen or in the bedroom といったとすると、お母さんはそのどちらにあるかは知っているわけであり、子供達もお母さんがどちらにあるか知っているということを知っているわけで、ノーマルな会話で or に伴う会話の含意がこの場合には棚上げされていることになる。 $p \vdash q$ というのは、 p が真なら q は必然的に真となるのでその含意は棚上げは不可能であるが、 $p; \neg q$ ⁸⁾ は真理価値に関係なく、この含意は場合により棚上げできる。

本題にもどって、Three of John's five children are in elementary school という文は、小学校に行っている子が2人かそれ以下なら偽になるので、少なくとも3人いるということはこの文の真理価値に関係する。この文の話者は、少なくとも3人ということを断定 (assert) しているわけである。しかし3人以上ではないということは真理価値の問題ではなく、もし4人もしくは5人全

8) $p; \neg q$ とは、'p conversationally implicates q' (p は q を会話的に含意する) ということをあらわす。

部が小学校に行っていることを知りながらこの文をいったとしたら Grice のいう十分な情報を与えるという会話の協力の原則に反するので、従ってこの文は小学校に行っているのが 3 人で、それ以上ではないと理解される。つまり 多くとも 3 人 というのは断定ではなくて 会話の含意なのである。

Four of John's children are in elementary school ということが分れば、Three of John's children are in elementary school が真であることは論理的に推論できるが、後者が真であることが分ったからといって前者が真であることは論理的に推論できないのであるから、前者が真なら、後者より前者をいう方が十分な情報を与えたことになる。数量詞は尺度的述語(scalar predicate) の典型的なものであるが、一般的にいって、このような表現を含んだ任意の文 p, q があって $p \vdash q$ である時は、 $q_{c.i.} \sim P$ が成立する。Four of John's children are in elementary school \vdash Three of John's children are in elementary school だから Three of John's children are in elementary school $c.i.$ Not four of John's children are in elementary school となる。
 §4.1 で All people are happy \vdash Some people are happy となるといったが、そうすると Some people are happy $c.i.$ Not all people are happy (= Some people are not happy) ということになる。同様に、None are happy \vdash Not all people are happy (= Some people are not happy) だから Not all people are happy (= Some people are not happy) $c.i.$ It is not the case that none are happy (= Some people are happy) ということになる。John is always happy \vdash John is sometimes happy だから John is sometimes happy $c.i.$ John is not always happy となり、John is never happy \vdash John is not always happy だから John is not always happy $c.i.$ John is sometimes happy となる。
 V と E 及びその否定の間に存在するこの会話の含意は非常に強く、ほとんど棚上げ不可能な位である。従って従来この関係は、論理的含意もしくは前提と思われて来たが、この節で述べて来たようにこれは会話の含意で、ただ非常に強いものと考えた方がよい。表4で \exists と $\sim V = E \sim$ を結ぶ線を点線にして、他の実線で示された関係と区別したのは、点線の関係が会話の含意によるもので、実線で示されたような論理的な関係ではないことを示すためである⁹⁾。

論理学の量記号は V と E だけだから、表4に示したような関係だけだが、自然言語では all, some, none だけでなく、数詞を別としても、§4.1 に述べたように

most, many, という肯定の尺度を示す表現や、hardly any, not many (=few), といった否定の尺度を示す表現がある。これらの間にも、もし任意の数量詞 Q_i を含む文が、別の数量詞 Q_j を含む文を論理的に含意するなら、後者は前者の否定を会話的に含意するという関係が成立する。簡略化してこのことを示すと、 $Q_i \vdash Q_j$ なら $Q_j c.i. Q_i$ ということになる。90—93 はその例示で略式で示せば、

- 90a $V \vdash$ most, many, 従って 90b most, many $c.i. \sim V$
 91a $\sim E \vdash$ ~many, 従って 91b ~many $c.i. E$
 92a $V_t \vdash$ many_t, 従って 92b many $c.i. \sim V_t$
 93a $\sim E_t \vdash$ ~many_t, 従って 93b ~many $c.i. E_t$
 ということを示す。

90. a. All of the students are happy \vdash
 Most } of the students are happy.
 Many }
 b. Most } of the students are happy $c.i.$
 Many }
 Not all of the students are happy.
 91. a. None of the students are happy \vdash
 Not many of the students are happy.
 b. Not many of the students are happy $c.i.$
 Some of the students are happy.
 92. a. John always comes home late \vdash
 John often comes home late.
 b. John often comes home late $c.i.$
 John doesn't always come home late.
 93. a. John never comes home late \vdash
 John rarely comes home late.
 b. John rarely comes home late $c.i.$
 John sometimes comes home late.

4.2.2. 会話の含意の否定と棚上げ。

ノーマルな否定は断定(assert) されている内容を否定するので、断定されている内容が偽なら、これを否定することにより真となる。つまり 94 と 95 は矛盾した発言である。

94. I solved three of the problems.
 95. I didn't solve three of the problems.
 94 は解決した問題が少なくとも 3 つであるといい、95 は 3 つに達しないといっているのであるから、94 と 95 は

9) 従来の論理学では点線の関係は「小反対」(subcontrary) と呼ばれ、そして小反対の関係にある発言(たとえば Some people are happy と Not all people are happy (=Some people are not happy)) は、両方とも真にはなり得ても、両方とも偽になることはないと説明されている。

矛盾する。

94の会話の含意は、解決した問題は3つ以上ではないということであるから、96は94の会話の含意の中に含まれる。

96. I didn't solve all of the problems.

96に示されたような94の文の会話の含意を否定するのは、ノーマルではない。97はそうした場合を示し、この場合は three に特殊な対比強勢が来る。

97. I didn't solve three of the problems.

I solved all of them.

§1.c の例文2はそうした特殊な場合なのである。97のように会話の含意が否定された文は94と矛盾することはない。

94は肯定の尺度の表現であるが、95は否定の尺度の表現で、98は95を論理的に含意するから、従って95は98の否定、すなわち99を会話的に含意する。

98. I solved none of the problems.

99. I solved some of the problems.

95に含まれる99のような会話の含意も否定できる。

100 参照。

100. I didn't solve three of the problems.

In fact I solved none.

97や100のような文が echo negation ともいるべき特殊な文脈で用いられることは §1.c で述べた通りであるが、それは通常の場合なら、97や100のようなまわりくどいことをいわすにはじめから I solved all of the problems とか、I solved none of the problems とかいえば済むからである。「無関係なことはいわない」(Be relevant) というのも Grice の協力の原則の一つである。

前述のような会話の含意の否定にくらべると、その棚上げの方はそれ程特殊なことではない。前述の復活祭の卵探しの例は、会話の含意が場面により棚上げされた例であるが、会話の含意を棚上げするための一連の言語表現がある。101, 102はその例である。

101. At least three of John's five children are in elementary school.

102. Three, $\left\{ \begin{array}{l} \text{if not } \{\text{more}\}, \\ \text{or possibly } \{\text{more}\} \end{array} \right\}$ of John's five
children are in elementary school.

101の文は At least がなければ、小学校に行っている John の子供は 多くとも3人 という会話の含意をもっている。At least はこの含意を棚上げにして、3人以上の可能性があることを示す。ちなみに At least のかわ

りに Exactly を入れると、この会話の含意を明示することになる。102も同様で、if not..., or possibly... という表現は、小学校に行っている子供が3人以上（もしくは全部）の可能性があることを示し、このような棚上げ表現を含まない場合この文がもっている 多くとも3人 という会話の含意を棚上げしている。

103, 104も同様な例で、104は many c.i. ~most ということを示している。

103. Most, if not all, of the students attended the party.

104. Further contextual considerations lead (in many, if not most cases) to the further conclusion that...Boer-Lycan 1976, p. 31.

105—107は、否定の尺度の表現に含まれる会話の含意が棚上げされた場合で、if any というのは if not none から出たものと考えられる。

105. $\left\{ \begin{array}{l} \text{Few} \\ \text{Not many} \\ \text{?Not all} \end{array} \right\}$ students, $\left\{ \begin{array}{l} \text{or possibly none,} \\ \text{if any} \end{array} \right\}$
could pass the exam.

106. John hasn't read many books, if any.

107. John has read $\left\{ \begin{array}{l} \text{only a couple of} \\ \text{at most three} \\ \text{no more than three} \end{array} \right\}$ books,
if any.

たとえば106の if any がない文の会話の含意は、John has read some books であるが、if any とか or possible none がつくと、その含意が棚上げされて、一冊も読まなかった可能性もあることが示される。ちなみに if any がなければ106は many の読みも可能である(表2参照)が、if any がつくと ~many の解釈しか可能でない。105で not all の前に? がついているのは、not all... に含まれる some... という会話の含意は棚上げできない程強く、この含意を否定したり、棚上げすると奇異になるからである。

108—110は、FAdv に含まれる会話の含意の棚上げの例で、108—109が肯定の尺度、110が否定の尺度の場合である。110の if ever は、105—107の if any と同様、if not never から出たものと考えられる。

108. John usually, if not always, comes home late.

109. There is often, if not usually, a presumption that.... (cf. There is usually or at least often a presumption that... —Strawson 1971, p. 87.)

110. John rarely, $\left\{ \begin{array}{l} \text{if ever} \\ \text{or possibly never} \end{array} \right\}$, comes home late.

以上にあげた例は大体表1、表3の[−SM]の数量詞、FAdvを含んだ文のみであるが、[+SM]の数量詞、FAdvの場合はどうなるであろうか。肯定文の場合は問題なく、これまで述べた原則で片がつく。108のusuallyは[+SM]の例である。111は名詞にかかる数量詞の場合の例である。

111. John has read {several
 {a couple of} books,
 {if not more.
 {or possibly more.

問題は[+SM]の数量詞、FAdvを含んだ否定文の場合で、この場合の意味はQ～(表2参照)となるのであるから、もし棚上げされるとすれば、否定の尺度でなく、肯定の尺度の原則に沿って棚上げされるのが筋であると考えられるが、そのような解釈は非常にこみ入って来るので、このような文に棚上げ表現をつけると非文になるケースが多い(112)。ただ112のかわりに113のようにいえば、大分よくなるという資料提供者がいる。

112. *John hasn't read {several
 {a couple of} books,
 {if not more.
 {if any.

113. ? John hasn't read a couple of those books, if
not more.

Three of John's five children are in elementary schoolという文の会話の含意は、小学校にいっているのが3人以上ではないということで、従って棚上げは、if not more, or possibly moreとなるが、これはMore than three of John's five children are in elementary school ← Three of John's five children are in elementary schoolだからである。しかしもし少ない方の数表現を含んだ文が、多い方の数表現を含んだ文を論理的に含意するなら、後者が前者の否定を会話的に含意することになる。114aはbを論理的に含意し、cを会話的に含意する(a ← b, a c. i. c.)。

114. a. John can live on \$ 400 a month.
b. John can live on more than \$ 400 a month.
c. John can't live on less than \$ 400 a month.

従って114aに棚上げ表現をつける場合は、cを棚上げするのであるから if not more でなくて、if not lessとなる(115)。

115. John can live on \$ 400 a month, if not less.

以上に述べたような棚上げ表現は、数詞を含む数量詞、FAdvといった典型的な尺度的表現だけではなく、他の尺度的表現にもつけられて、それがどういう尺度をなすかを知るようになる。 $\xleftarrow{\text{ugly, plain}} \xrightarrow{\text{pretty, beautiful}}$ はそうした尺度的表現であるが、116はよいが117はい

けないということは、美しいという意味をあらわすのにbeautifulの方が pretty より程度が上で、不器量をあらわすに ugly の方が plain より程度が上であることを示す。更に118がいけないということはこの4つの形容詞が矢印で示したように2つのグループに分け、一直線の段階をなしているのではないことを示す。

116. a. She is pretty, if not beautiful.
b. She is plain, if not ugly.
117. a. *She is beautiful, if not pretty.
b. *She is ugly, if not plain.
118. a. *She is pretty, if not plain.
b. *She is plain, if not pretty.

116aの棚上げが可能なのは、She is beautiful ← She is pretty で、従って She is pretty c. i. She is not beautiful で、if not beautiful, or possibly beautiful は、She is not beautiful という会話の含意を棚上げして、beautiful である可能性もあるといっているわけである。

$\xleftarrow{\text{cold, cool, warm, hot}}$ も同様で、矢印で示したような段階に分け、4つが一直線の段階をなしているのでないことは、119—121を見れば分る。

119. a. It's warm, if not hot.
b. It's cool, if not cold.
120. a. *It's hot, if not warm.
b. *It's cold, if not cool.
121. a. *It's warm, if not cool.
b. *It's cool, if not warm.

このことは更に、It is warm. In fact it's even hot / It's not only warm but hot / It's cool. In fact it's even cold / It's not only cool but cold はよいがこれらの文の warm と hot もしくは cool と cold を入れかえるとおかしくなり、It's cool. In fact it's even warm / It's not only cool but warm がおかしい文であることにより裏付けされる。

このように会話の含意及びその棚上げは、単に数量表現だけでなく、その他色々の尺度的表現(その中には時間表現も含まれる)がどういう階層をなしているかを探るための有力な手掛かりとなるものと思う。

自然言語の意味は、論理だけでは片付かない複雑なものであることは明らかである。だからといって論理学の成果を利用しないのも得策ではない。会話の含意は、そもそもは論理的記号と自然言語の論理的表現との間にあるずれを説明するために考え出されたもので、論理だけでは自然言語の説明はできないことを示すと同時に、出発点はやはり論理であったことを忘れてはなるまい。否

定と数量詞の意味解釈のような問題では、特に論理的考察を抜きにしては考えられない。論理学で開発された道具を自然言語の意味説明のためにどう脱皮させて行くかという所に、意味論の重要な課題の一つがあるであろう。

(上智大学教授)

引用文献

- Boer, S. E. and W. G. Lycan. 1976. 'The myth of semantic presupposition'. *Working Papers in Linguistics*, Ohio State University, No. 21, 1-90. Indiana Univ. Linguistics Club により刊行。
- Carden, Guy. 1973. *English quantifiers: Logical structure and linguistic variation*. Tokyo: Taishukan.
- Grice, H. Paul. 1967. 'Logic and conversation' Unpublished lecture notes from William James Lectures at Harvard.
- Jackendoff, Ray S. 1972. *Semantic interpretation in generative grammar*. Cambridge, Mass.: The MIT Press.
- Katz, Jerrold J. 1972. *Semantic theory*. New York: Harper and Row.
- Kroch, Anthony S. 1974. *The semantics of scope in English*. Doctoral dissertation, MIT. Indiana Univ. Linguistics Club により刊行。
- Langendoen, D. Terence. 1970. *Essentials of English grammar*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- 太田 朗 1977. 『英語学と英語教育をめぐって』英語教育協議会 (ELEC).
- Postal, Paul. 1974. *On raising*. Cambridge, Mass.: The MIT Press.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik. 1972. *A grammar of contemporary English*. Longman.
- Strawson, P. F. 1971. 'Identifying reference and truth-values' *Semantics: An interdisciplinary reader in philosophy, linguistics and psychology* (ed. by D. D. Steinberg and Leon A. Jakobovits, Cambridge Univ. Press), pp. 86-99.

(P. 5 よりつづき)

朴な生活にも価値があることを知つてほしかったからである。私たちと親しくなったJのうちでは、家族のクリスマスのプレゼントは、すべて自分の手でつくりあげたものだったし、果物も野菜もみんな庭からとれるものを食べていた。バナナは特別の日にしか買わないというのにはいささかおどろいたこともある。

クエーカーの学校に通っていた子供たちは、懸念していた問題もおこらず、それぞれ友だちもできるようになった。「ジャップ」などと呼ばれたことはいちどもなかったのは、さすがにクエーカーの学校だったからであろうか。何よりも私を心配させたのは、子供でも約束と時間をまもったことであった。当然のこととはいえ、その点いささかルーズな日本から来ると、心地のよい習慣であった。

タスマニアにもいろいろな人たちが住んでいた。地元生まれの人、本土から移って来た人、それからもちろん英国やヨーロッパ生まれの人たちもいたが、ヨーロッパから移住してきた人たちは、さすがに郷愁のおもいをすべてかねているようだった。どこまでも続く濃紺の海、翼をひらめかせて飛ぶかもめの群。その風景は、美しくはあったが、ロンドン、パリ、ベルリンに育った人たちにとっては、救いがたい辺境の風景であった。私たちが妻の手術のため日本へ帰ることになったとき、英国出身の医者のH氏は、「今度は北半球のクリスマスですね」と一瞬さびしそうに手をさした。

(元タスマニア大学日本科主任助教授)

『英語展望』バックナンバー

- No. 58, 1977年夏季号 ￥ 530
〔国際展望〕小暮和男・後藤一正
仏英独の旅に想う 國弘正雄
Intensive English Course D. W. Overton
Oral Approach 実態調査 (II) ELEC 教材・教授法研究グループ
高校段階の Pattern Practice 大橋菊子
バラッドの世界 (その8) 平野敬一
英語の謎 (その6) 戸田 豊
- No. 57, 1977年春季号 ￥ 530
特集: どんな英語を学ぶべきか
Panel Discussion: Which Should We Aim At,

Accuracy or Expressiveness?

K. Butler, W. Grootaers, M. Higa,
K. Nakao, M. Kunihiro

- Nos. 55・56, ELEC 創立20周年記念号 ￥ 960

特集: English Education in Japan
A. Ota, K. Ito, T. Torii, S. Hashimoto,
L. Lau, T. Akiyama, L. Ogasawara

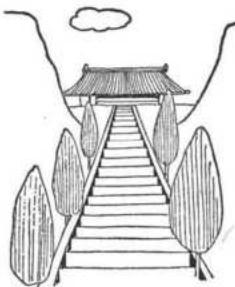
- No. 54, 1976年夏季号 ￥ 480

特集: 異文化間コミュニケーション (2)
高橋源次, John C. Condon

- No. 53, 1976年春季号

特集: 異文化間コミュニケーション (1)

★ご注文は当出版部へ。送料は各号共￥ 120,
ただし Nos. 55・56は合併号のため￥ 160。



退いて内を固める

—変化する国際社会と日本経済—

KUNIHIRO MASAO

國 弘 正 雄

「皆さん、人の命のはかないことは」、と柿色の僧衣を、仏典にいわゆる「偏袒右肩」さながらにはおった高僧は、ことばを呑んだ。

ときは1963年、場所はセイロン島——いまのスリランカ——の一仏教寺院である。欧州からの帰途、私はインドを経て、この仏教国に杖を曳き、南方仏教——小乗仏教——というのは侮蔑的なひびきがあるので使わない——の実体を見聞すべく、とある寺院に詣でた。土地の衣服に身をつつんだ善男善女が高僧の英語による説法に耳をかたむけ、しわぶき一つ聞こえない。

「ちょうど、日本製品のようなものです」ということばが、次の瞬間、私の耳朶を搏った。くらくらするほどの衝撃とともにである。

恐らくはその大僧正貌下は、日本人がいることをご存じなかったのであろう。インド亜大陸を歩きまわった私の膚は、土地の人と区別がつかないほど焼けていた。一堂に会した信者さんも、よもや私が当の日本人だとは気づかなかつたらしい。だれ一人、顔をのぞきこむような非礼はおかさない。そして、だれ一人として、笑い声を発しないことが、私を妙に物悲しくした。

せめてだれかが笑い声をあげてくれたら、いや、一人でもいい、ほほえみをかけてくれたとしたら、遊子の心は、なにほどかなごんだのに、感情をあらわにしないことを美德とする、おだやかな彼ら南方仏教徒は、無感動とみえるほどの表情で、導師の次のことばを、待っていたのだった。

欧米における、日本製品への保護貿易主義の高まりを論ずるにあたり、この挿話を話の枕にしたいとおもったのは、時世時節の移り変わりを、これほど生々しく物語ってくれるものは、ほかには考えられないからである。

せいぜい十数年まえまでは、日本製品のイメージといったら、「安かろう、悪かろう」、つまりは cheap but shoddy と相場がきまっていた。いわゆる先進国においてはむろん、発展途上国においても大同小異だった。

だからこそ、ゆゆしき師のご坊が、諸行無常 (evanescence of life) を説く際に日本製品を例示しても、だれもあやしまなかつたのである。私が出会ったのはまさに幸いな偶然で、おそらくは一種の慣用表現、ないしは cliche として、かなりの普遍性を有していたと、想像されるのだ。

だが、いまや事態は一変した。日本の自動車や船舶、弱電機器や鉄鋼製品が品質においてしばしば世界のトップをいくものであることを、欧州人も北米人も、痛いほど知っている。だから、かつて哲人エマソンがいったと伝えられる If you build a better mousetrap, the world will beat a path to your door. ということばが真理であるとするなら、日本は千客万来、下自ら蹊をなしても少しも不思議はない。

げんに日本は、他国と少なくとも同質の「ネズミトリ」を作っている。その性能において決して他国製品に劣らない。しかも価格は割り安、ときている。売れるのは当然である。資本主義の原則の一つは、よくて安いものは買い手がつく、というのであり、これが資本主義における競争原理を支えていることは自明である。

にもかかわらず、EC や北米諸国は、日本製品に高い障壁を設けようとしている。資本主義の一大原理を軽んじても、である。いったいこれは何故なのだろうか。少し考えてみたい。この背後にある彼らの内なる論理を知ることなしに、徒らに自由貿易の大旗を押し立て、よくて安いものは売れて当然という態度を墨守するだけでは、問題が厄介の度を加えるであろうことは疑いない。しかもことは、日本人1億1千万の榮枯、いや生存にかかるてくる。

EC や北米の政治や経済の指導者はまた、日本が必ずしも伝統的な意味におけるダンピングを行なっていないことも知っている。これは、この3月に会ったジスカル・デスタン大統領(仏)も、ヒーリー副相(英)も明言していた。

同様に彼らは、日本の勤労者の労働賃金や労働条件が、かつての劣悪さを脱し、とくに日本に独特な付加給付 (fringe benefits) の多様性や、終身雇用による職場の安定 (job security) を勘案すれば、むしろ優位に立ちつつあることも承知している。(この際、日本の物価、とくに食料品と住宅の腹立たしくなるほどの高さ、も問題にすべきだし、この点は私も異人さんにたえず説いているところだが、ここでは立ち入らぬことにする。むしろ、こういう説明が、彼らに poor-mouthing、つまりは人の憐れみを乞うために、殊更に自らの貧窮ぶりを強調する作為と受けとられがちなことを指摘しておく。)

にもかかわらず——といま一度いわねばならない——彼らは日本製品を防遏しようとする。一体、なにゆえなのだろうか。そして日本人としては、どう対応していったらよいのだろうか。世界経済の場で日本が差別されていると感じ、閉塞状況に在るという思いの高まりが、国内に台頭し充满していった際に、日本人が対外的にどういう反応を示すか、不安が皆無とはいえぬだけに、これはとり急ぎ解明を要する問題であると、私には思われる。戦前、日本の運命が坂おとしに落ちていったすぎゆきが、寒々しい思いで想起されるからである。

一つの大きな理由は、日本製品の進出が、国際競争力をいまや大きく消退させた EC や (ある程度までは) 北米諸国に、失業の増大をもたらすという機微である。

これらの国々は、いまやことばのもっとも広い意味における国民の福祉——welfare という誤解を招きやすいので、むしろ well-being という語を用いる——に重大かつ深刻な関心とかかわりとを有する。国民の well-being を守ることに、主権国家の存在理由は第一義的に存するので、それを守ろうとしない主権国家や政府など、なんの raison detre もありはしないと、多くの人々も考え、政府もそれを胆に銘じている。

国民の well-being に対する最高の脅威が、失業であることは、喋舌する必要とてなかろう。事実、フランスのように、北欧やイギリスと比べた際には、保守派に属する政体ですら、失業者への配慮はおどろくほど手厚い。日本と比較しての話である。

失業者は、就労時の賃金の九割にあたる失業保険 (unemployment benefits) を、実に 2か月の長期にわたって支払われる。日本だと、4割からどれほど多くても 8割を、6か月内外——ごく稀な場合に 9か月——支払われるにすぎぬことに想到すれば、フランスの失業保険制度の充実ぶりは一目瞭然である。スカンジナヴィア諸国や英國など、福祉国家を自他ともに認める場合に

は、なおさらである。

いやしくも失業を増やすような国の内外の動きに対し、諸国(の)政府が鋭敏な上にも敏感なのは、かくして納得がいく。そこでは、自由貿易 (free trade) のスローガンは容易に二階にあげられる。ましてや戦後の世界経済をともかくも支えてきた GATT-IMF 体制が、事实上、根崩れをおこした今日においては、大した抵抗感もなく、である。

自由貿易よりも「公平な貿易」(fair trade) というのが新しい旗印として登場してくる。国家主権の発動はしきりである。ときとしては、資本主義の原理をわきにおいてまで、また、消費者大衆の利益、つまりは安くてよい品物を入手するという利益、をよそ目にみつつ、失業を防ぐという大義名分のもと、国家の主権発動は、日本製品の輸入制限という形をとってあらわになるのだ。

このあたりの機微を、まず頭に入れる必要がある。とくに日本自身、たとえば豪州の牛肉について、有形無形の輸入制限を行なっているにおいておやである。『なぜ牛肉は高いか』という近著は、この間の事情を伝えて間然するところがない。

ましてやその著者が、業界の事情をあきらかにしたという咎で、責任をとらされ職を追われたと聞くにつけては、生産者保護、失業防止は、なにも EC や北米諸国の専売特許ではないことをわれわれは知る。

いま一つの理由は、欧米、とくに EC の人々が、いまやかなり明確に物ばなれしていることに求められよう。安くてよいから、といって彼らはむかしほど物品を入手しなくなってしまった。これは北アメリカでもある程度まではそうだし、日本にもその萌芽はみられるが、EC の場合、とくに著しいと私の目には映じた。

どうやら彼らは、ダニエル・ペルの用語にしたがうなら、脱工業社会への道を歩みはじめたらしいのである。個人の生活においてそうであるとともに、一国経済という面でもそうであるらしい。

彼らにとって、もはや経済とは、個人であると集団であると問わず、自己目的化した存在ではなくなりつつある。むしろ経済を、どう社会化し、自然化し、人間化させるか、の方が関心事であるらしい。拡大よりは、むしろ退いて内を固める、という気風が、当の経済人や各界のリーダーを捉えている。

西独との交易に従っている私の身内も、ことごとにそれを感ずると洩らしていた。彼の取引先の輸出メーカーは、どうも自社製品の日本における占有率、すなわち market share をふやそうとしている風には、みえない

というのである。むしろ着実に、従来どおりの取引きを、静かに、渋滞なく進めていくことに、関心があるという。

進んで城門をひらいて、外に打って出るよりは、退いて城の守りをかたくする、とは彼の用いた比喩である。

私も彼の観察に同意する。なにか文明次元での変化が、ゆるやかに、しかし確実におきつたると、私は観る。西独ですらそうであると、もしするなら、より少なく aggressive である（と想像される）イギリスやフランスなどについては、この見方はもっと当てはまるであろう。

日本と北米、とくに合衆国、とが、いまやいわゆる先進国中のただ2つの拡大派、つまりは城門を開いて外に敵を求める気風の持ち主に化ってしまった、といえるのではないか。ある意味では、この二者だけが時代の趨勢にとりこされた、とすらいえるのかも知れない。

しかも合衆国ですら、拡大派の気がまえを減じつつある。経済の量的拡大をもって、彼らはもはや最高至善の価値とは認めなくなってしまった。

EC 諸国が、それぞれの国の、ひいてはヨーロッパの、そして究極的にはこの地球というホシの有限性を身にしみて理会し、その認識にみあって、経済の量的拡大の自己目的化から、その社会化、自然化、人間化へとギアを入れ替へはじめたのとほぼ軌を一にして、合衆国——カナダはむかしから合衆国ほどいわゆる経済動物ではなかった——も、徐々にではあるが、方向転換を模索しているのだ。

たとえば、ポスト カーターの大統領候補を噂されるカリフォルニア州のブラウン青年知事が、その環境行政重視、消費者の利益保護、行政改革、とくに big government の撤廃をスローガンに、全米的な支持をあつめているのは、その予兆の一つである。未萌の機を察することが、われわれの任務の一つであるなら、彼が一般の人気に投じている所以のものを、精査する必要が渺くないと思われるのだ。ブラウンについていえることは、大なり小なりカーター新政権下の合衆国全体について当てはまる。

ではどうしたらよいのか。

もとより私ごときには名案があろう筈はない。

彼らが日本に対してみせるいらだちの一つが、日本が一方において百億ドルもの貿易収支（経常収支ですら48億ドル近く）の黒字をあげながら、全世界的な責任をほんの少しあはたしていないことに由来することだけをあげておこう。

ただ急ぎ加えておくべきことは、責任といつてもいわゆる防衛という分野では必ずしもない点である。EC はとくにそうだが、合衆国ですら一昔まえほどには日本の防衛力増強を求めてはいない。一つには、軍事力の役割が相対的に減じつつあるという世界的な認識が高まりつつあるからで、いま一つは、日本の軍事力の増大があるいは核武装にまでエスカレートし、アジアにおける新しい緊張の種になることを、ほとんど本能的に怕れているからである。私はこの懸念を多とする。軍事力はしばしば、ガン細胞に似て自己触媒的 (autocatalytic) であるとは、ノーベル賞科学者セント＝ジェルジ老博士の名言であり、私もこれを肯う。

しかし、日本の途上国への経済技術協力が、その量と質の両面において、世界最低であることへの彼らの憤激が、おどろくほどつよいことは注目されてよい。事実、いかなる経済指標に拘っても、援助量の対 GNP 比が低いのみならず、その中におけるいわゆる ODA、つまりはヒモつかない、非商業ベースの援助の比率も、際立って低い。量のみならず、質の劣悪さが批判されるゆえんである。

これにはさまざまな理由があり、やむをえない事情が介在することも了解せぬではないが、ことが急を要することは、今まで述べ來たったことからも明らかであろう。自分のフトコロだけを肥やすに急で、愛他精神のひとかけらもない経済動物という評価に、長く耐えうる日本ではないことを痛感するからである。ひよわな花・日本、という評語の適切さが、身に染む秋が到来しつつある。

いま私は愛他主義といった。むろん私として欧米諸国の対外援助が愛他主義にのみ発していると信ずるほど、ナイーヴではない。そこには、先進国同士の交易では、落語の花見酒みたいなもので、葛藤や磨擦が避けられず、総体も大きくならない。どうしても途上国に購買力をつけてもらわねば、という資本主義生き残りの計算もはたらいている。

だが、挿話ではじめた本稿を、いま一つの挿話で結びたい。数年前、スエーデンのバルメ首相（当時）に会った折のことである。約束の時間に十数分おくれてきた彼が、申しわけなさそうに、「学生のデモに会っていたので」と詫びる。なんのデモ、というわれわれの問い合わせに対し、彼はこともなげにいったものだ。

「途上国援助が足りぬ。もっと増やせ、という要求でした」

因みにスエーデンは、質量ともにもっとも援助に熱心な国であったし、いまもある。（国際商科大学教授）

UNDERSTANDING SPOKEN ENGLISH



Gretchen E. Weed

Why do most Japanese students have trouble understanding spoken English? If they *see* the same thing they usually comprehend the meaning right away. This situation prompted me to analyze my own spoken English to find the answer to the problem. The results of this analysis leads me to suggest ten principles of conversational speech. Since I am an American these principles apply to spoken American English only. I feel, however, that Japanese students have more trouble with spoken American English than with British English. Again not every American applies all of these principles all of the time but I feel the majority do.

Principles one to five are concerned with the flow of speech. Japanese students are used to looking at separate words but in the flow of speech words are not spoken separately. The beginning of one word affects the ending of the word before it. These phonetic changes confuse the student.

Principles six to ten are concerned with the importance of the tongue being up and touching in the alveolar position in the mouth. There are seven consonants here (/t,d,s,z,r,l,n/) and they influence each other or are influenced by the sounds around them. This happens not only across word boundaries but also within words as well.

Besides these ten principles there are three other features to keep in mind about spoken English.

One is the wide use of contractions. You don't see these much in formal writing but they are almost always used in speech.

The second feature is the occurrence of the unstressed vowel (/ə/ or /ɪ/) for the regular vowel sound. This happens when the word is in an unstressed position in the sentence or phrase. I hope to do more investigation on this point at another time.

The third feature concerns the top ten most common words. Care should be taken to see that they are pronounced correctly and that they are not omitted where needed.

Following the outline of this material is an essay on "American Cooking and Eating Habits" which I wrote and that appears in *Listen and Learn, Vol. 2* (pages 36 and 37) — an ELEC textbook. I have marked the numbers of the principles under the line and the letters of the features above the line on the text. You can see the frequency of the various principles this way as well as use it as an oral exercise. Practice joining the last sound of one word to the next word, for example:—latter, broil after. Continue joining words, then practice phrases and sentences until it is smooth and fairly rapid.

In conclusion I have added a small dialogue adapted from the ELEC *English Conversation, Book I* (page 30). This conversation can easily be taught to a class in one hour and illustrates all ten principles and three features.

I recommend that you look for and use these principles in teaching whatever materials you are required to use. The in depth outline and analysis is for your background and would probably frighten your students if presented to them all at once.

PRINCIPLES OF CONVERSATIONAL SPEECH

- I. Principles of Conversational Speech as seen in the text of "American Cooking and Eating Habits" (plus other material)**

- A.** The flow of speech as revealed by the absence of word boundaries. (Practice joining words together but not across punctuation marks.)

- 1. Unreleased stops.** In the flow of speech stops are unreleased before the next word. /p, t, k/ and /b, d, g/

think one	you'd notice
shop only	quick dinner
method of	went to
but we	it too
about life	cook casseroles
up to	drink coffee

There are many, many examples of these.

- 2. No open transition between other consonants.** No sound voiced or unvoiced.

of the	is complete
main difference	person notices
have them	of frozen
while few	always serve

There are many examples of these also.

- 3. Continuation of voicing after vowels.** At least no glottal stop before voiceless consonants. (/r, w, y, h/ = vowels in this paper)

the United	the need
no American	more meat
we use	soy beans
do in	few Japanese
country is	I think
you went	the first
we eat	a person
or rice	no soy
to bake	another country

Many examples also.

- 4. Connection of other final consonants to initial vowels.**

things a	kitchen is
----------	------------

one of	couple of
in another	notice right
life in	fish or
broil after	in a

Frequent examples also.

- 5. Dropped consonants.**

roast meat	do her
first things	wants his
almost no	is he
must go	but has
except for	*tell them
find mysterious	couldn't have
most popular	didn't his
last night	time in the evening
ask him	on the hour
asked him	cup of coffee
asking him	couple of steaks
tell her	*going to [gənə]

*Not recommended speech but will be heard.

- B.** The importance of the *tongue up* position. Especially for sounds made at the alveolar position, and this is where there are the most consonants. The points 6-10 mentioned below apply not only to situations between words but also within a word. (/t, d, s, z, r, l, n/)

- 6. /t/ between voiced sounds becomes /d/ (or flap /d̪/).** But not if it begins a stressed syllable.

right away	go to	potatoes
eat as	notices	pattern
without an	necessity	typewriter
that is	cutting	portable
it is	little	quarter
put a	Saturday	theater
not only	United	catalogue
lot of	eating	sorted
be to	tomatoes	faulty
not at all	refrigerator	publicity

7. /nt/ becomes /nd/ or /n/, and /nd/ becomes /n/ between voiced sounds.

won't need	hundred
don't eat	atlantic
don't make	pointing
and almost	wanted
and one	printed
and eating	painted
and we	interesting
mind asking	interview
sound like	entertain
find the	sounds
send it	didn't feel
sent it	wind chime
twenty	*want' to [wanə]
plenty	

Practice, for example, mountaiñ: tongue goes up for /t/ and stays there, then soft palate opens to make /n/.(Think /t/ plus humming sound.)

9. Syllabic /l/. Very common as the contraction of will. John will. (John'll)

mentál	modél	vegetables
bottle	vinyl	table
settle	whistle	typicál
metál	puzzle	tickle
little	tunnél	pickle
capital	apple	single
total	simple	level
pedál	couple	awful
handle	double	nickéł
	idle	

8. Syllabic /n/.

bat ánd ball	writtén	hiddén
cut iñ two	buttón	suddén
better thán me	gottén	widén
food ánd	curtáiñ	studént
potatoes ánd	mountaiñ	gardén
lettuce ánd	senténce	lessón
oven ánd	straightén	reasón
work ánd	importánt	seasón
cooking ánd	cottón	frozén
during ánd	fountaiñ	
wait úntil	frightén	

10. sts and sks. /t/ and /k/ drop between eses.

largest	cities	artis/s
mask	sold	mask/s
guest	seen	ask/s
first	street	desk/s
last	spring	cos/s
ask	Sue	ghost/s
guests		architec/s

II. Other Features of Spoken English

A. Contractions.

1. am	I'm	/m/	am not	I'm not
2. is	John's	/z/	is not	Mary isn't
	Jack's	/s/		
	Rose's	/əz/		
3. are	boys'er	/ər/	are not	John and Mary aren't
	we're	/wɪr/		
4. have	I've	/v/	have not	We haven't
	John and his wife've	/əv/		
5. has	John's	/z/	has not	John hasn't

	Jack's	/s/		
	Rose's	/əz/		
6.	had	/d/	had not	John hadn't
	I'd	/d/		
	Jack'd	/əd/		
7.	will	/ɪ/	will not	John won't
	John'll	/ɪ/		
	Jack'll	/əl/		
8.	would	/d/	would not	John wouldn't
	I'd	/d/		
	Jack'd	/əd/		
9.	shall	/ɪ/	shall not	John shan't
	what'll	/ɪ/		
			Other negatives:	
			can not	can't
			could not	couldn't
			would not	wouldn't
			was not	wasn't
			were not	weren't
			does not	doesn't
			do not	don't
			should not	shouldn't

B. The unstressed vowel. (/ə/ or /ɪ/)

Some words change to the unstressed vowel when they are in an unstressed position in a sentence or phrase.

can	I can swim.	for	four for a dóllar
could	He could dríve.	or	an hour or so
to	Be sure to téll her.	are	things are cóoking
them	Don't forget to ásk them.	than	taller than mé
that	She was so upset about thát that she críed.	as	eat as much fish or rice
		*you	if you wént to the USA

C. Top 10 most common words.

They make up one-fourth of all spoken and written English. (25%)

- | | | | | | |
|---------|-------|--------|-------|------|-------|
| 1. the | 2. of | 3. and | 4. to | 5. a | 6. in |
| 7. that | 8. it | 9. is | 10. I | | |

AMERICAN COOKING AND EATING HABITS

1. I think one of the first things a person notices about life in another country ^(A)
 3 1 4 2 3 5 4 3 2 6 4 1 4 4 3 3
2. is the difference in food and eating habits.
 3 3 4 3 2 8 4 6 3
3. If you went to the United States, I think you'd notice right away that we eat ^{B* A}
 4 3 1 3 3 6 1 3 1 1 4 6 1 3 1 3 1
4. more meat, potatoes and bread. But we don't eat as much fish or rice, and almost
 3 6 2 8 2 1 3 7 4 6 3 2 4 3 7 4 5
5. no soy beans.
 4 3 3
6. Perhaps another thing you'd notice is the method of cooking. The main dif-
 4 3 4 1 6 4 2 3 1 2 3 2

7. ference is the use of the oven. While few Japanese homes have them, no American
8. kitchen is complete without an oven. We use it to bake potatoes, roast meat, and
9. cook casseroles. It is also increasingly used to prepare frozen foods.
10. One important reason for the use of the oven and also frozen foods is the
11. need for efficiency. Many American housewives work and so they need to save
12. time. They spend far less time preparing foods and grocery shopping than house-
13. wives do in Japan.
14. A typical quick dinner might be to put a couple of steaks in the oven to broil
15. after which a package of frozen vegetables is put in a pan on top of the stove.
16. While these two things are cooking, the wife prepares a simple salad of lettuce
17. and tomatoes, sets the table, and makes the coffee. In half an hour or so, the
18. dinner is ready.
19. Because of this desire for efficiency, a large refrigerator is a necessity. It
20. is not only big, but has a large freezing compartment. Frozen foods in it are ready
21. to be used without cleaning or cutting. Besides little or no food preparation, this
22. large refrigerator allows the average housewife to shop only once a week . . .
23. probably Saturday morning.
24. Of course, you'd notice immediately that the United States is a nation of coffee
25. drinkers. We always serve coffee to guests as you might serve tea, and we also
26. drink coffee during and after our meals. Most Americans drink their coffee black,
27. that is, without cream or sugar, and that's one reason we don't make it too strong.
28. Perhaps you can see from this discussion how the American way of life influences
29. our cooking and eating habits.

C = 24.8%

Principle numbers below the line.

Feature letter above the line.

* = Not recommended but heard sometimes.

(A) = Not a written contraction but probable when spoken.

SAMPLE CONVERSATION

- A. Would you do me a little favor?
B. Certainly. What is it?
A. Would you mind asking Sue to call me
tomorrow?
B. Not at all, what time shall I ask Sue
to call?
A. Any time in the afternoon.
B. O.K. I'll be sure to tell her.

C=22.2%

Biographical Sketch of Ms. Gretchen E. Weed

Since coming to Japan in January of 1969 Gretchen E. Weed has taught English first at ELEC (The English Language Education Council, Inc.) in Tokyo and then from 1972-1977 was the Director of EXCEL English Conversation School in Yokohama. From 1970 to 1973 she was a lecturer in Cultural Anthropology at Tokyo University of Foreign Studies where she also taught Conversational English. She is active in the College Women's Association of Japan and the Foreign Teacher's Association in Japan of which she has been the President for the past two years (1975-1977). Besides these groups she enjoys music, reading and playing mahjong. Prior to coming to Japan Ms. Weed was engaged in linguistic research for three years in Ghana, West Africa, with the Summer Institute of Linguistics. She is now teaching with Time-Life educational systems.

英語教材案内 (I)

ELEC 出版部

英会話 世界の不思議

C. V. Harrington 編著 ￥580
カセット 全2巻セット ￥4,000

不思議な世界の風俗習慣等を題材にした問答によって表現力を養うユニークなテキスト。

CONTROLLED CONVERSATION

全3巻 各￥580, オープン 各￥2,000
1, 2—各全5巻, 3—全6巻

平易な英語のジョークについての問答練習を中心に、楽しみながら会話力を身につける。

絵で学ぶ英会話 1, 2

テキスト 各￥860, 教師用書 各￥800
カセット 各￥2,000, 1—全7巻, 2—全5巻

現代アメリカ英語の口語表現が基礎から系統的に学べる、理想的なテキスト。

INTRODUCING CONTROLLED CONVERSATION

テキスト ￥580

カセット 全4巻 ￥8,000

Controlled Conversation の姉妹篇。対象は中学上級以上でクラブ活動用教材にも最適。

英語会話教本 1, 2

テキスト 各￥980

カセット 各￥2,000, 1, 2—各全12巻

正しい言語学理論に基づいて作成された、最もスタンダードな英会話テキスト。

LISTEN AND LEARN 1, 2, 3

テキスト 各￥680

カセット 各全2巻セット ￥4,000

集中的訓練によりヒアリングの力を飛躍的に増大させる画期的なテキスト。

●ご注文は最寄りの書店または当出版部へ。

電話 (03) 265-8911 振替東京 3-11798



バラッドの世界(その9)

—“Edward”(チャイルド13B)をめぐって—

HIRANO KEIICHI

平野敬一

岡倉編 *Old English Ballads*について

岡倉由三郎が研究社英文学叢書の1冊として *Old English Ballads* (以下 OEB と略す) を編注して世に問うたのは、半世紀以上も前の大正12年(1923)のことだった。同書は序文23ページ、本文(バラッド35篇) 262ページ、ノート 147ページ、索引 25ページからなる充実した内容のもので、日本におけるバラッド研究の先駆をなすものとして画期的な業績であることは、何人も否定しえない。その後のバラッド学の著しい進歩を考えると、岡倉の OEB は「当時としては」すぐれた業績、というふうに限定したくなるのだが、実は、いまなお同書はわが国で出版されたバラッド研究書中最高のものという地位を譲っていないように思われる。これは岡倉の天才と力倅を示すものであり、氏にとっては名誉なことであろうが、氏の後に続いたはずの日本のバラッド研究家にとっては必ずしも名誉なことはいえないであろう。私は岡倉の OEB をひもとく度毎に、多くのことを教えられ、感銘を受けるのだが、これだけの感銘を与えるバラッド研究書は、この半世紀あまり、わが国では出版されていないように思われる(万一、私の見落としたら、ご教示を乞う)。

大正の末ごろといえば、チャイルド教授のあの5巻の大著 *The English and Scottish Popular Ballads* (1882—98) はすでに世に出ていたし、その成果は岡倉の OEB に充分とりいれられているが、なにぶん今に比べると、資料(特に音声資料)の面では、話にならないほど不自由な時代だったはずである。おそらく岡倉は、バラッドがどういうふうに歌われているか、あるいは recite されているか、その実際を、自分の耳で確かめる機会をもちえなかったのではないか。多くのバラッドに対してつけた個性ゆたかな氏のノートや解説を読んでいくうちに、私は、もし岡倉がそういうバラッドの伝承の実態に触れることができたら、どういう反応を呈しただろう

か、その鑑賞はもっと深くなったのではなかろうか、などとあれこれ想像をめぐらしたくなるのである。

岡倉のバラッド本の魅力は、どこにあるのだろうか。氏のすぐれた芸術的感受性がバラッドの本質と美しさをみごとにとらえているだけでなく、その類まれな語学力からくる読みの正確さも加わり、余人の追隨を許さないのである。感受性と語学力とを併せ持つというだけでも並大抵のことではないのに、明治時代の日本人のみが持ちえたような深い東洋的教養と古武士の気骨とでもいうべきものがさらにそれに加わるので、解説の筆は、いっそう味わい深くなるのである。英米の大多数のバラッド研究家の解説よりは、格段に(少なくとも私にとって)氏の解説の方がおもしろいのである。OEBの序となっている「大黒舞」という文章(これは恩師 Chamberlain に「大黒舞と云ふ舞踊の歌詞」の英訳を頼まれたいきさつを書いたもの)もおもしろいが、個々のバラッドに対する岡倉の反応の仕方やそれに伴う連想に氏の個性が躍如としていて興味がつきない。かつて17世紀の好事家オーブリ(John Aubrey, 1626—97)が紹介した古いお通夜の挽歌 “Lyke-Wake Dirge”¹⁾にわが国の御詠歌を連想したり、また “Baron of Brackley” (Child #203) というスコットランド辺地の豪族がその奥方に裏切られる物語に源義經に操を立てたわが静御前を引き合いに出さずにおれないところなど、いかにも岡倉らしいのである。ブラックリー男爵の奥方の裏切りを、岡倉は、ものわかりよく解説したりしない。「この ballad を読んで行く誰にでも気づく変な所」とか「二重人格の不調和」というふうに、ことの是非がはっきりしている。許容しえないものは、許容しえないのである。古風ともみえるこういう姿勢は、現在では、かえって新鮮で爽快さえあり、五十有余年経た古さを少しも感じさせない。

岡倉の漢文調の文章も、時代を超えた魅力を有している。具体的な例を挙げてみよう。チャイルド13番に、

1) OEB に収録されているが、チャイルドの305番の中には入っておらず、現今バラッド選集から外されるのが通例。

“Edward”というバラッドがある。それを岡倉は次のように解説紹介している（ルビ以外は原文のまま）。

「母なる人その夫と快(+)からぬ事があって、わが子を唆して父を亡き者の数に入らしめる。子の血刀を見て母は訝(ば)り問ふ。さすがにあらはの答もならず初に愛鷹(愛鷹)をあやめた血だと言ひ後に愛馬を切った血だと言ふ。共に母の疑を釋(+)くに足らず遂に怖(畏)るべき事実を口にし母に対する呪(?)を吐(+)く。惨また惨、語辞も亦よく之に適して悲痛の情が語調の上に躍如としてゐる。Childをして“‘Edward’ is not only unimpeachable, but has ever been regarded as one of the noblest and most sterling specimens of popular ballads”と嘆称の声を發せしめたのも無理でない。云々」（OEB, p. 364）

岡倉としては尾錠を付けずこのバラッドの内容を正確に要約しただけのことであろうが、バラッドというものがもつ当世離れした雰囲気を伝えるのに岡倉の文章の「語辞も亦よく之に適して」といわなければなるまい。「惨また惨」に匹敵しうる表現を、間延びしてしまった現代日本語に求むべくもないように思われる。

“Edward”というバラッド

岡倉編のOEBが掲げている“Edward”はチャイルド13番のB versionに依っている。このB versionはペーシィ（Thomas Percy, 1729—1811）の例の*Reliques of Ancient English Poetry* (1765)に基づいているため Percy versionと称することもある（これに対してチャイルド13番のA versionはその典拠から Motherwell versionとも呼ぶ）。チャイルドは、これを13番Bとして*The English & Scottish Popular Ballads*に採録するにあたり、擬古に走りすぎている綴りを多少normalizeしている（例：quhy→why）。岡倉は同じバラッドをOEBに採録するに際し、日本の読者の便宜を考え、チャイルドの掲げた形をさらにnormalizeした。綴り以外は、ほとんどチャイルドのものと差異がないので、ここでは岡倉に敬意を表してOEBのversionを掲げてみよう。

- 1 ‘Why does your brand sae drop wi’ blude,
Edward, Edward?
‘Why does your brand sae drop wi’ blude,
And why sae sad gang ye, O?
‘O I hae killed my hawk sae gude,
Mither, mither;
O I hae killed my hawk sae gud,
And I hae nae mair but he, O.’

（「どうしてお前の剣からそんなに血が滴るの、エドワードよ。どうしてお前の剣からそんなに血が滴るの、それにどうしてそんな悲しそうに歩くの」「ああ、あんなに利口だったぼくの鷹を殺したのです、母上よ。ああ、あんなに利口だったぼくの鷹を殺したのですよ、ぼくのただ1羽の鷹だったのに、ああ」）

（語注：brand=sword；sae drop wi’ blude=so drip with blood；sae sad=so sadly；gang ye=go [walk] you；hae=have；gude=good；mither=mother；nae mair=no more）brandのような文語が使われているところから、このバラッドは民衆的（popular）というより文学的（literary）な作品だといわれるし、綴りにも措辞にも人為的な不自然な古さがあるといわれている。上記の岡倉versionでは、その古さがそれほど目立たないが、チャイルドのB version（これももとのPercyの形よりは、よほど「現代的」になっている）では、その古さ（擬古性）がもっとはっきりしている。参考まで第1連だけ挙げてみると‘Why dois your brand sae drap wi bluid,／Edward, Edward,／Why dois your brand sae drap wi bluid,／And why sae sad gang yee O?’／‘O I hae killed my hauke sae guid,／Mither, mither,／And I had nae mair bot hee O.’となる。dois, bluid, yee, guid, bot, heeなどの擬古形を岡倉版のものと比較されたい。

話へ戻ろう。Edwardは自分の剣から滴り落ちるのは銅っていた鷹の血だというが、母は信じない。鷹の血の色にしては鮮やかすぎるようだと母がいうと、息子は今度は自分の赤毛の馬を殺した血だという。

- 2 ‘Your hawk’s blude was never sae red,
Edward, Edward;
Your hawk’s blude was never sae red,
My dear son, I tell thee, O.
‘O I hae killed my red-roan steed,
Mither, mither;
O I hae killed my red-roan steed,
That was sae fair and free, O.’

（「お前の鷹の血は、けっしてそんなに赤くなかった、エドワードよ。お前の鷹の血はけっしてそんなに赤くなかった、愛する息子よ、この私がそういうのだよ」「ああ、ぼくの赤毛の馬を殺したのです、母上よ。あれほど美しく自由に駆け回っていた赤毛の馬を殺したのですよ、ああ」）

（語注：red-roan 赤毛に白あるいは灰色の毛が一面にまざったもの。white-roan ならわが「葦毛（アシモ）」にあ

たる。steed=horse) あんな老馬を殺したところで、どうということはなかろう。まだ何頭も持っているんだから、なにか悲しみの原因は他にあるはずだ、と母が問いつめると、息子はついに父親殺しを白状する。

- 3 'Your steed was auld, and ye've plenty mair,
Edward, Edward;
Your steed was auld, and ye've plenty mair;
Some ither dule ye dree, O.'
'O I hae killed my father dear,
Mither, mither;
O I hae killed my father dear,
Alas, and wae is me, O!'

(「お前の馬は老いていた、それにまだたくさん持っているではありませんか、エドワードよ。お前の馬は老いていた、それにまだたくさん持っているではありませんか。お前はなにか他のことで悲しみに暮れているんですよ」「ああ、ぼくは父を殺したのです、母上よ、ああ、ぼくは父を殺したのです。ああ、わが身に災いあれ！ ああ」)

(語注 : auld = old; mair = more; ye've plenty mair チャイルドでは ye hae gat mair; ither = other; dule = grief; dree = vt. suffer, endure; wae is me = woe is me!)

それでどういう償いをするつもりかと母がたずねると、息子は舟に乗って海を越えて行くつもりだという。舟に乗って海の向こうへ行くというのは、バラッドの世界では死出の旅の象徴となるのが通例。この場合も例外ではない。

- 4 'And whatten penance will ye dree for that,
Edward, Edward?
Whatten penance will ye dree for that?
My dear son, now tell me, O.'
I'll set my feet in yonder boat,
Mither, mither;
I'll set my feet in yonder boat,
And I'll fare over the sea, O!'

(「その罪に対してどういう償いをするつもりかね、エドワードよ。どういう償いをするつもりかね、愛する息子よ、教えてくれ」「あの舟に乗り込みます、母上よ。あの舟に乗り込んで海のかなたへ行くつもりです、ああ」)

(語注 : whatten = what kind of; fare = go, travel) バラッドでは、肉親の死が不可避であることが判明すると悲嘆に暮れるなどという悠長なことをしない。ただちに遺産をどうするかというきわめてリアルな問題へ関心が切り替わるのである。以下第5連の問答は、邸の広大

さから「Edward の身分を思わせるもの」と岡倉は注記している。

- 5 'And what will ye do wi' your tow'rs and
your ha',

Edward, Edward?

And what will ye do wi' your two'rs and
your ha',

That were sae fair to see, O?'

I'll let them stand till they doun fa',

Mither, mither;

I'll let them stand till they doun fa',

For here never mair maun I be, O.'

(「お前の邸の塔や大広間をどうするつもりかね、エドワードよ。みんなに見る目も美しかった塔や大広間をどうするつもりかね」「倒壊するまでほおっておきます、母上よ。倒壊するまでほおっておきますよ、もうぼくはここにいてはいけないんだから!」)

(語注 : tow'rs = towers; ha' = hall; doun fa' = down fall; never mair = never more; maun = must)

エドワードに妻子のあることが次の問答で明らかになる。しかしエドワードは妻子になんの未練も愛着もないらしい。

- 6 'And what will ye leave to your bairns and
your wife,

Edward, Edward?

And what will ye leave to your bairns and
your wife,

When ye gang ower the sea, O?'

The world's room: let them beg through life,
Mither, mither;

The world's room: let them beg through life;
For them never mair will I see, O.'

(「子供たちや嫁には何を残すのかね、エドワードよ？ お前が海のかなたへ去ってしまうと子供たちと嫁には何を残すのかね」「世間は広いんだ、死ぬまで物乞いをさせればいいんだ、母上よ。世間は広いんだ、死ぬまで物乞いさせればいいんだ。もうぼくは2度と彼らに会わないんだから!」)

(語注 : bairns = children; ower = over; The world's room = the world is roomy [岡倉注]。ここでいちおう岡倉注に従ったが、この room はおそらく名詞であろう。The world's space, i.e. the whole world というほどの意味と思われる。)

"Lord Randal" (Child #12) の場合もそうだったが、バラッドはその最終連が dénouement (事件解決) となり、そこでいっきょに事件の実相あるいは主人公の本心が明らかにされることが多い。最後になって、父を殺せ

と唆したのは実は母親、あなただったのですよ、地獄の呪いを受けなさい、と息子は吐き出すように母への呪いを口にする。

7 'And what will ye leave to your ain mither dear,

Edward, Edward?

And what will ye leave to your ain mither dear?

My dear son, now tell me, O.'

'The curse of hell frae me sall ye bear,

Mither, mither;

The curse of hell frae me sall ye bear:

Sic counsels ye gave to me, O!'

(「お前のいとしいお母さんになにを残すの、エドワードよ。お前のいとしいお母さんになにを残すの。愛する息子よ、教えておくれ」「地獄の呪いをぼくから受けなさい、母上よ。地獄の呪いをぼくから受けなさい。そのような〔父を殺せという〕助言をぼくにしたのは、あなたなのだから、ああ！」)

(語注 : ain mither dear=own mother dear. この言葉の中に母親と息子との間の並々ならぬ関係を読みとる研究家もいる。frae=from; sall=shall; Sic=Such)

以上がチャイルド→岡倉と手を加えられてきたPercy version の "Edward" 全7連である。

Percy version の特性

岡倉も引用しているように、チャイルド教授は、その*English & Scottish Popular Ballads* (vol. 1, p. 167) で『ニードワード』は非の打ちどころがないというだけでなく、民衆バラッドの中のもっとも高貴にてもっとも真正なる見本の一つと常にみなされてきた」とこのバラッドを絶賛しているが、それはけっして過褒とはいえない。母子の問答だけで話が進められるのだが、始めから終わりまで寸分のゆるみもなく、読者(あるいは聞き手)は事件の核心へ、有無を言わせず、引きずりこまれていく感じである。伝承の過程で形成されていくことの多い民衆バラッドとしては、出来がよすぎる、というケチがつくのも、けだし止むをえまい——とそう思いたくなるほどのみごとな作品になっている。

そのためか、このPercy version の "Edward" は、チャイルド以降のバラッド研究家に特に愛好され、岡倉編のOEBだけでなくHodgart編*The Faber Book of Ballads* その他代表的なバラッド選集はチャイルド13番を収録する際、例外なく13BのPercy versionを選ぶ。A versionの方は、チャイルド以外ほとんど問題に

されないかのごとくである。

ところが、実際の伝承となると、A versionが俄然優勢になる。というよりバラッドとして伝承されているのは A version(あるいはその系統を引くもろもろのversion)だけであって、B versionはバラッドのアンソロジーにおいてのみ命脈を保っている、というのがどうも現状であるらしい。

現実に伝承されてきたversionの1つにスコットランドはアバディーンの偉大な伝承歌手 Jeannie Robertson の歌うversionがある。同じスコットランドの、やはり当代バラッド歌手の名手マッコールもそのversionを歌っているので、それを掲げてみる。題して。“My Son David”²⁾。

1 'O, what's the blood that's on your sword?

My son, David, O, son David;
What's the blood that's on your sword?
Come, promise, tell me true.'

2 'O, that's the blood of my grey mare,
O, lady mother, Hi, lady mother;
That's the blood of my grey mare,
It wouldna rule by me.'

3 'O, that blood it is ower clear,
My son David, O, son David;
O, that blood, it is ower clear,
Come, promise, tell me true.'

4 'O, that's the blood of my hunting hack,
O, lady mother, Hi, lady mother;
That's the blood of my hunting hack,
It wouldna rule by me.'

5 'O, that blood it is ower clear,
My son, David, O, son David;
O, that blood it is ower clear,
Come, promise, tell me true.'

6 'O, that's the blood of my brother John,
O, lady mother, Hi, lady mother;
That's the blood of my brother John,
He wouldna rule by me.'

7 'O, when will you come back again?
My son, David, O, son David;
When will you come back again?
Come, promise, tell me true.'

8. 'When the sun and the moon meets in yon
glen.
O, lady mother, Hi, lady mother;

2) 廃盤になった米 Westminster Record WLP 718 から。Jeannie Robertson の唄は英 Topic Records 12T160 に収録されている(ただしこれは3連のみ)。

When the sun and the moon meets in yon
glen,
Then I'll return again.'

(大意：1.お前の劍についている血はなんですか、息子のデーヴィッドよ。さあ、約束して、ほんとうのことをいいなさい。2.それは灰色の雌馬の血です、母上よ。ぼくの灰色の雌馬の血です。ぼくのいうことをきこうとしなかったのです。3.(それにしては)その血は澄みすぎています。さあ、ほんとうのことをいいなさい。4.それはぼくの鷹の血です。ぼくのいうことをきこうとしなかったのです。5.その血は澄みすぎていますよ。さあ、ほんとうのことをいいなさい。6.弟のジョンの血なのです。ぼくのいうことをきこうとしなかったのです。7.こんどいつ戻ってきますか。さあ、ほんとうのことをいって。8.太陽と月とが向こうの渓谷でいっしょになったら戻ってきます。語注：wouldna=would not; rule by me=obey me; ower=over, too; hack=hawk)

このversionは、もともと Robertson 家（ジブシーの家系）に伝承されてきたもので Jeannie は唄の内容を次のように理解してきたと解説している³⁾。「David と John の2人は金持の息子で David の方が兄だった。しかし弟の John は強情なやつで自分が主人になりたがった。David はそれを認めるわけにいかず、2人は決闘し、David が弟を殺したのです」と。

ここでただちに気付くのは、バラッドの主人公の名が Edward でなく David となっていること、それに犯罪が父親殺し (patricide) でなく兄弟殺し (fratricide) になっていることである。さらに Percy version では母親が親殺しの教唆(説教)者になっているが、このversionでは母親の役割りは明らかにされていないのである。ただし、この最後の点に関連して上記 version と同系統のチャイルド13番の A version (いわゆる Motherwell version) の最終連をみると次のようになっている。

What wilt thou leave to thy mother dear,
Son Davie, son Davie?
A fire o' coals to burn her, wi hearty cheer,
And she'll never get mair o' me⁴⁾.

(お前はこの愛しい母親に何を残すのかね、息子のデーヴィーよ？ 彼女を焼き殺す石炭の火をくれてやろう、喜び勇んで、それで親子の縁は切れるんだ。)

(語注：o=of; wi=with; mair=more). 母に対する恨みは、けっして弱くない。この怨恨は、ただごとでない、と私たちは思う。なるほど Percy version の "Edward" に比べると、いくらかおだやかかもしれな

いが、アメリカの Twitchell 教授 (フロリダ大学) のようにこの結末から母親の innocence(犯罪への非荷担) を引き出すのは、少々無理のように思われる⁵⁾。

ともあれ、現実に伝承されている version は英米に少なくないが、例外なく上記の Jeannie Robertson の version のようにチャイルド13番の A version (Motherwell version) の流れを引いている。

チャイルド 13A の Motherwell version は David (あるいは Davie) を主役とする兄弟殺しの唄、13B の Percy version は Edward を主役とする父親殺しの唄というふうにいちおうチャイルドの2つの version を対比させることはできるが、もうひとつ重要な対比点は、前者が現実に伝承されてきたのに対して、後者には、今までのところ伝承された形跡はまったくない、という点である。

伝承の形態においても対照的なこの2つの version の関係は、興味深い問題を他にいろいろ含んでいる。たとえば A version にしろ B version にしろ、殺人のほんとうの動機がどうもはっきりしないのである。歌詞面にあらわれていないほんとうの動機があるとすれば、それはなんだろう。また B version の方が作品としてすぐれているにもかかわらず A version のみが伝承されてきたのは、なぜか。それは、たんなる伝承上の偶然ということなのだろうか。そういう点について次稿で引き続き考えてみたい。

(東京大学教授)

3) *The Folk Songs of Britain, Vol. 4* (英 Topic Records 12T160) の解説より。

4) F.J. Child, *The English & Scottish Popular Ballads*, vol. 1, p. 169.

5) See James Twitchell, "The Incest Theme and the Authenticity of the Percy Version of *Edward*" in *Western Folklore*, vol. xxxiv (1975), no. 1, pp. 34-35.

(P.41よりつづき)

てしみはつかない) は、ほんとうにりっぱな人は不名誉なことはしない、ということである。冒頭において、諺は性善説の立場を取ると述べたが、このことをもっともよく表わしている諺を出してこの章をしめくくりたい。Hell is paved with good intentions. または The road to hell is paved with good intentions. (地獄への道は善意で舗装されている) である。Boswell の *The Life of Samuel Johnson* 中の 1775年4月16日の記事の中にもあるもので、善行をしようと思いながら意志薄弱のために果たせずに地獄へ落ちる人が多いということを表わしている。

(静岡県立清水東高校教諭)



英語の諺(その7) —悪人と善人—

TODA YUTAKA

戸田 豊

愚かさがおおむね生まれつきのものであるのに対して、悪さはどちらかというと後天的に作り上げられていくものである。先天的な愚かさ、お人よし、間抜けには愛すべき面もあるが、忘恩、狡猾(くわう)、悪辣(あらわ)には人に嫌惡の情を催させるものがある。愚かな人についての諺は多くあっても賢い人についてのものは少なかった。諺は人間、人生を好ましい一面からよりも、裏側の好ましからざるもう一方の面から見ようとする。賢人よりも愚人、そして今度は、善人よりも悪人が登場する回数が多くなってくる。人間生活の実相を前向きに見たものではなく、裏側から見て表現することによって、一層際立って眞実を強調しようとする。負の表現といつてもいいものである。眞理を述べるのに、その眞実性を強く印象づけるには、形式的には肯定文よりも否定文、平叙文よりも命令文を用い、内容的には、望ましい人間、ことがらを述べるよりも、望ましからざる人間、ことがらを扱うほうが効果的である。

**He that touches pitch shall be defiled
(therewith).**

諺は性善説の立場をとっているようだ。No man ever became thoroughly bad [all] at once. (一度に極悪人になった人はいない)は、人間の性は本来善であることを暗示し、人が悪くなるときは、少しずつ段階を追って悪くなっていくものだ、と同情的である。No man becomes worse at the first dash. ともいう。なお、この諺は、その起源をラテン文学に持ち、イギリス文学には16世紀末に Sir Philip Sidney (1554-86) が *Arcadia* の中に、There is no man sodainely excellentlie good, or extremely evil. (突如として極端に良くなったり、悪くなったりする人はいない)という形で、良くなる場合にもあてはまるように用いている。

人が次第に悪くなっていくのは、当人の置かれた環境によるところが大きい。中国の古諺は「朱に交われば赤

くなる」という。『聖書』*Apocrypha, Ecclesiasticus* 13.1 の He that toucheth pitch shall be defiled therewith. (瀝青に触れればかならずよごれる)は、口語訳では Handle pitch and it will make you dirty. となり、諺としては He that touches pitch shall be defiled [therewith]. とも He that [who] touches pitch will be defiled. ともいう。悪人と交われば悪に染まらざるを得ないことを表わしている。Evil communications corrupt good manners. (悪い交際は良い作法を損なう)もまた『聖書』に由来し (*1 Corinthians* 15.33), evil communicationsとは本来 foul words, ill words, evil speeches, ugly discourse の意味を持ち、この一句は、悪しきことは良きならわしを損なう、ということであった。今では、この communication は普通 company の意味にとられている。口語訳『聖書』では、Bad company is the ruin of a good character. (悪い交際は良い人柄をこわすものになる)となっている。狼の比喩を用いて、Who keeps company with the wolf will learn to howl. (狼と付き合う者は吠えるようになる)という表現もある。これもまた悪人と交われば次第に悪に染まっていくということである。中国の諺である「麻(ま)に連(つ)るる蓬(よし)」は良き交友の感化を受けて善人になることを表わし、「水は方円の器(うつわ)に隨う」は、人の性質が交友や境遇次第で良くも悪くもなるたとえである。交友については、次の章でさらにくわしく見ていくことにする。

Once a thief, always a thief.

3日やったらやめられないのは乞食ということになっている。英語では、Once a beggar, always a beggar. である。他人様のお情けにすがって、消極的にものを頂いて糊口をしのいでいる乞食に対して、積極的に他人の所有権を侵害してまでも生活の糧を得ようとするのが泥棒である。乞食といえ、泥棒といっても、その本質は他

人の迷惑をかえりみずくに、人のため世のためにもならず生きようという根性には変わりはない。消極的であるか、積極的であるかの違いである。Once a thief, always a thief. (一度泥棒をやるといつまでも泥棒)は悪の道にいったん入り込むと習い性となりそこから抜けられない、悪習、悪癖はなかなかおらないことを表わしている。

悪習、悪癖はかならずしもおせないものでもないし、悪い性格もかならずしも生涯そのままというわけでもないが、諺は一方的にしかも断定的に、泥棒はいつまでも泥棒、ときめつけてしまう。悪の世界から抜け出すことの至難であることをいやが上にも強調している。Once a knave, and ever a knave. (ならず者はいつまでたってもならず者)/Once a whore and ever a whore. (ばいたはいつもばいた)と類似の諺にもこと欠かない。老いてもなお悪い本性を持ち続けるものであることをThe wolf may loss his teeth, but never his nature. (狼は歯がなくなても本性は失わない)は示している。狼だけでなく、狐もまた悪さ、するさを象徴する動物であるから、A wolf [fox] may change his hair but not his heart [nature, malice]. (狼〔狐〕は毛の色は変わっても心〔本性、悪意〕は変わらない)とか、The fox may grow but never good. (狐は毛が灰色になるほどに年をとっても性質は良くならない)とも表わされる。悪い本性も悪い習いもともに終世つきまとうとすれば恐ろしいことである。He is gray before he is good. (心をいれかえないうちに年をとってしまった)と言われないように心がけようとするのは、ともすれば悪の誘いに抗しきれない人間の姿であろうか。「雀百まで踊り忘れず」は良いことにだけ限って用いたいものである。

There is a sin of omission as well as of commission.

悪人の悪事は文句なしにたしかに悪い。しかし悪人がつけいるのを許しているような人も考えに入れない片手落ちである。悪事を暗にそそのかすようなことを善人はしていないだろうか。悪事がはびこるような社会をだれが作っているのだろうか。悪人の悪事だけを責めることに急で、悪事を醸成したり、誘発させたりするわれわれの日常の行為や環境に対する反省がややもするとなおざりにされている。Opportunity makes the thief. (機会が泥棒をつくる)は、すきを与えられると魔がさして悪事に走ってしまう気の弱い人がいることを示して

いる。盗ってくれよ、とばかりに財物をぞんざいに扱っていると、悪への誘惑に負けてつい手を出してしまう盗人を作ってしまう。われわれのわずかの不注意がもとになつて、おそらく悪事に手を染めないような人をも悪人にしてしまう場合がある。「泥棒もはずみから」ともいう。

他人の悪事を見て見ぬふりをするのも悪事の一つである。とかく、他人は他人、自分は自分と割り切って、後難を恐れてか、「さわらぬ神にたたりなし」ときめこんで、他人の悪さを放任しがちである。悪事への一種の加担とも見なされるのである。There is a sin of omission as well as of commission. (実行の罪と同様に不実行の罪もある)は、そのような事情をものがたる諺である。みずから悪事を働くのは、いうまでもなく悪いことであるが、他人の悪事を黙認しているのもそれにまさるとも劣らず悪いことである。黙って見過すことは暗に容認したことになる。ここでも Silence gives' consent. (沈黙は容認)という諺があてはまる。悪事を働くことが積極的な罪であるとすれば、悪事を知って知らぬ顔をしているのは消極的な罪である。盗品と知りながら、それを買ったり貰ったりするのも悪事に加担していることになり、盗んだ者と同罪である。いやそれどころか、将来の悪事を助長することにもつながることであるから、時には罪さらに重いとも言える。The receiver is as bad as the thief. (<盗品を>受け取る人は泥棒も同然)は、Where be no receivers there be no thieves. (盗品を受け取る者がいない所では、泥棒もいない)という諺によって一層その意味が際立ってくる。この The receiver is as bad as the thief. という諺は、人を中傷する場合に、他の人達が言っていることを繰り返しているだけだ、と言っても、やはりその人を中傷していることに変りはない、という場面でも用いられる。他人についての悪口を言っているのに、自分はいい子になっていたいという人間が多い。尻馬に乗っても同罪である。

Two blacks do not make a white. も Two wrongs do not make a right. もともに、文字どおりの意味は、2つの悪行は1つの善行とはならない、ということであるが、これだけではなんのことか分からぬ。同一人物が悪事を重ねることは、言うまでもなく、善行になるどころか、悪の上に悪をうわ塗りするだけのことである。そういう内容もこの諺は含んでいるが、もう一つ大事なのは、だれかが悪いことをしたからといって、同じ悪さを自分もしていいということにはならない、という意味を持っている。他人が悪いことをして、うまい汁を吸っているのを見聞して、自分もやらなければ損だとばかり

に悪事に手を染める手合がいるものである。その犯した罪に対する言い訳が、こんな悪さはだれだってやってる、自分だけ責められるのはおかしい、といったものである。このような言い訳を吐く人に向ってこの諺は言われるのである。悪事を働いている人がいるからといって、自分も法を破っていいということにはならない。また、さらにもう一つの意味は、他人から加えられた悪に対して、悪をもって報いるのはまちがっている、ということである。

このようにあまり罪の意識を持たずに悪さをしてしまうのが凡人の哀しさであるが、「猫ばば」もまたその一つである。Finding's keeping./Finding is keeping./Findings [are] keepings.（見つけたものは取っておいていいもの）は、「拾い物はわが物」ということであり、やはり悪事の一つである。Findings, keepings! という形もあり、偶然拾い物に出会った時に叫ぶことばでもある。また、Finders keepers. とも言う。A good name is sooner lost than won.（名声は得るよりも失うほうがはやい）という諺がある。長い間かかって得た名声もささいな非行によってたちまちにして消えてしまう。犯罪といわず、ささいな不始末でも命取りになるものである。

Murder will out.

過ちや悪事が露頭することを「尻が割れる」と言うが、英語では Murder will out. とか Murder cannot be hid. と言う。どんなに密かにたくらまれ、慎重に企てられた悪事でもいつかはばれるものである。Murder will out.（殺害はばれるものである）と、諺は悪事の発覚は確実であるかのように断定するのであるが、例外的に人の目をくらまして露頭されずに済んでいる悪人、悪事を無視しているところが諺らしい。かならずばれるものである、ということによって悪への誘惑に思いとどまる悪人もいるであろうし、善良な人もまた被害にあっても慰めと救いを与えられる。諺は一面的にしろ真相を断定するところがいい。murder という悪事の中の最悪なるものを用いて、その他もろもろの悪事を含めて Murder will out. なのである。The thief will be found out at last.（泥棒はけっきょくつかまる）という諺は直接的である。同じように、悪事露頭の諺に Stones will cry out.（石でも叫ぶ）がある。これは『聖書』Luke 19.40 I tell you that, if these should hold their peace, the stones would immediately cry out.（あなたがたに言うが、もしこの人たちが黙れば、石が叫ぶであろ

う）に由来する。悪事があまりにもひどいので、心なき石でさえも動かされて叫びを上げる、ということである。

The murder is out. はとつぜん秘密が明らかになったり、分からなかったことが分かったりした時に発せられることばである。Murder will out. は悪事が明るみに出ることであるが、The truth will out. は、眞実は一時的に隠されていることはあっても、いつかはかならず人目にさらされ流布するものである、ということを示している。「天網恢々疎にしてもらさず」とよく言われるが、God's mill grinds slow but sure.（神のひきうすはゆっくりだがたしかである）は、天罰はゆっくりと確実に下ることを表わし、The pitcher goes often to the well, but is broken at last.（水差しあいく度も井戸へ運ばれているうちに、結局こわれる）は長続きした悪事も結局ばれるものである、ということを表わしている。これらはいずれも「天網恢々……」に相当するものである。後者は The pitcher [pot] goes so often to the well [water] that it is broken at last./So long goes the pot [pitcher] to the water [well] that at length it comes home broken. とも表わされ、その意味として、あまり調子に乗り過ぎるとしくじるということから、長続きした成功もついには失敗に終わる、というのもある。これはさしづめ、「おごる平氏は久しからず」に当たるであろう。Pride goes before a fall./Pride will have a fall.（おごる者久しからず）という『聖書』Prov. 16.18 に由来することばを思い起こさせる。

悪人みずからがみずからの悪事を露頭する場合がある。調子に乗り過ぎて悪事に耽っているうちにみずから馬脚を現わしてしまうのである。Give a thief rope enough and he'll hang himself.（泥棒に綱をたっぷり与えてやれ、そうすれば自分で首を絞めるだろう）のrope は絞り首用の綱と行動の自由という2つの意味を合わせ持っている。悪い奴にはするがままに勝手にやらせておけば、どうせ最後はみずから身の破滅を招く、ということである。この諺の a thief は a fool に代わるときもあるし、もっと一般的に代名詞の目的格が用いられることがある。泥棒でもほかでもだれでも好きなように勝手に振舞わせておけば身を滅ぼすようになる、ということである。さらに句として, give one rope (enough) または give one plenty of rope ができ上り、愚行、悪事の結果としてひどい目にあうまで自由にやらせておく、という意味を表わす。犯罪、悪事が露頭してひどい刑罰を受けるとなれば、Crime doesn't pay.（犯罪はひきあ

わぬもの) という諺が生きてくる。Sow the wind and reap the whirlwind. (風をまいてつむじ風を刈り取る) は、悪いことをしてその何倍もの罰を受ける、ということである。

As good [well] be hanged for a sheep as a lamb.

悪業はひきあわないものになることを覚悟の上で悪事をそそのかす諺がある。それは As good [well] be hanged for a sheep as a lamb. (子羊を盗んで絞殺されるくらいなら親羊を盗んで絞殺される方がました) である。これは、昔、羊どろぼうは盗んだ羊が子であろうと親であろうと見つかれば絞殺刑に処せられるので、どうせ見つかった場合に殺されるのであれば、盗むのは子羊より親羊のほうがいい、ということに由来している。悪事を働く時に大罪でも微罪でも罰が同じなら、大きな悪事をしたほうがました、どうせやるならなまほんかなことをやるな、いずれ窮地に追い込まれるならまず思い切ってやれという意味であり、「毒を食(%)わば皿まで」にあたる。一見大悪をそそのかすような諺であるが、用いられるのはたいていゲームの場合であり、負けを一举に挽回しようとするなら大胆に徹底的にやれ、ということである。この諺の形態は、You [One] may as well be hanged for a sheep as a lamb./As good be hanged for an old sheep as a young lamb. とも表わされる。

この諺の1748年の用例に、In for the lamb, as the saying is, in for the sheep. というのがある。この用例と同じ構造を持つ諺が、In for a penny, in for a pound. (少額でも払う破目におちいったら、このついでに大金でも払え) である。この諺は、羊どろぼうの場合と同じように「毒を食わば皿まで」の意味があるが、それよりはむしろ「乗りかけた船だ後へは引けない」という意味で、やり出したことはどんな儀性を払ってもことんまでやれ、という場合に用いられる。なまほんかなことをするな、いったんやり始めたらむこうみずに続けよ、という意味の諺としては、Over shoes, over boots. (<水が>短靴を越すなら、深靴をも越す所へ) がある。

Set a thief to catch [take] a thief.

悪事が自然に明るみに出たり、悪党みずから尻尾を出すようであれば、世の中も泰平であろうし、悪人自体はびこることもないはずだ。Murder will out. という諺

だけで安心はしておれない。知能犯は頭脳の使い方を誤った方向にむけた才知にたけた人間の場合が多い。たやすくばれるようなことはしない。となると悪人を追う者には、悪人をしのぐ緻密な頭脳が求められる。いやそれよりも、てっとりばやく、その道の秘訣を知る泥棒を使って泥棒を追え、ということになる。泥棒をよく知る者は泥棒以外にない。Set a thief to catch [take] a thief. (泥棒を捕えるには泥棒を使え) がもっとも有効な方法となる。悪人を捕える最善の方法は別の悪人を使って捕えることである。「蛇(%)の道は蛇(%)」である。A thief knows a thief and a wolf knows a wolf. (泥棒は泥棒を知り、狼は狼を知っている)とか、悪人は他の悪人の考え方や手口を知っているという The wolf knows what the ill beast thinks. (狼は他のするいけどものが考えていることが分かる) という諺がある。したがって悪事の経験者が悪事を取り締まるにもっとも適任であるという皮肉な諺も出てくる。An old poacher is the best keeper. (年をとった密猟者が最上の番人である) や The greatest deer-stealers make the best park-keepers. (極悪の鹿どろぼうが最上の獵園管理人になる) は、絞り首を覚悟の上で密猟を企てた悪人がいることを示唆する諺である。われわれは「毒を以て毒を制す」と言う。Like cures like. (似たものが似たものを治す) や One nail drives out another. (ある一本の釘が他の釘を押し出す) という諺も、悪事を抑えるのに悪人をもってする、という意味をもっている。なお、後者には、Nail drives out nail. という形もあって、同類の新しいものをもって古いものに代える、という意味を持っている。One love drives out another. (ある愛が別の愛を追い出す) というのは、新しく愛の対象が生じたために、それ以前の愛の思いが忘れ去られていくことを表わしている。

それはともかくとして、悪をもって悪を制するとはいえ悪人の結局はかたい。There is honour among thieves. (泥棒どうしの間に体面がある) は、泥棒は一般人からものを盗るのはなんとも思わないが、他の悪人に害を及ぼすようなことはしない、ということを表わしている。Dog does not eat dog. (犬は犬を食わない) は、「同族相食まず」で、悪人の世界にも通用している。これとても、諺には矛盾するものがあって、時には悪人仲間にも仲違いは生じるということを暗示する When thieves fall out, then honest men come by their own./When rogues fall out, then honest men come by their own./When thieves fall out true men come by their goods [to their own]. (泥棒が仲違いする

と、正直者は自分の物を持っていられる) という諺がある。その意味するところは、泥棒が仲違いすると、いさかいいに忙殺されて正直者は盗られずにすむ、ということであり、また、泥棒の仲間割れから盗品は正直者に戻る、ということでもある。

An idle brain is the devil's shop.

魔がさしたり、そそのかされたり、必要に迫られたりなどと悪に手を染めるきっかけは多くあろうが、打ち込むものを持たないために暇をもてあまして、悪だくみをする者も出てくる。われわれには「小人閑居して不善をなす」ということばがある。かならずしも外向的な悪事とは限らないが、とかくスリルを求め、無聊のうっぷん晴らしに他に迷惑の及ぶことをする。興味と関心に向ける対象のない人の考えることは恐ろしい。前章ですでに出てきたものであるが、An idle brain is the devil's shop. (怠け者の頭は悪魔の仕事場) / If the devil find a man idle, he'll set him to work. (悪魔は人が怠けていると、仕事を見つけてやらせる) / The devil finds work for idle hands to do. (悪魔は怠け者のやる仕事を見つけてやる) / Satan always finds work for idle hands. (悪魔はいつも怠け者に仕事を見つけてくれる)などはいずれも人は何もすることがないと悪事に走りがちであることを示している。これらは、若い人たちに悪いことをさせないように忙しく働かせたり、勉強させたり、遊ばせたりせよ、ということを暗示している。There is no peace for the wicked. (よこしまな人は心安まる時がない)は、心がけの悪い人にはすぐ邪魔が入って平静が破られる、ということから、なかば冗談にいやな仕事を言いつけられた時に用いたりする。the wicked を the wicked にしないように、ぶらぶらしている人には仕事を言いつけたほうがいいのかもしれない。この諺は、『聖書』Isaiah 48.22 の There is no peace, saith the Lord, unto the wicked. (主は言われた、「悪い者には平安がない」と) に由来する。

Open confession is good for the soul.

犯してしまった悪事を胸におさめて悶々として悔いていても自責の念はつのるばかりである。What is done cannot be undone. (やってしまったことはやりなおすことはできない) とか Let bygones be bygones. (過ぎたことは過ぎたこととせよ) という諺は、これまでのことは取り返しがつかないのでから、過去にこだわらず

新しい一步を踏み出そう、という意味を持っている。再出発のためには、やはり過去のことは清算しなければいけない。過ちや悪事の場合にはなおさらである。It is never too late to mend. (改めるのにおそすぎることはない) は、「過ちを改めるのにはばかりことなかれ」にあたる。Open confession is good for the soul. (罪の告白は心の救い) は、罪深いことを胸にしまっておくのは心の平静を乱す、ということである。これは悪事を自慢そうに話す人に向って皮肉のことばとして用いられることがある。悪事を悔い改める気持はおろか、悪事を吹聴して得意然としている厚顔無恥な人がいるものである。はたしてこの諺の皮肉がこういう人に通ずるかどうか疑問である。それはさておき、やはりまず改悛の情を示すことが心の重荷を少しは軽くしてくれるはずである。A fault confessed is half redressed. (罪を告白することはなかば改めたことになる) は A good conscience is a soft pillow. (心安ければ眠りも安らか) へと導いてくれる。A guilty conscience needs no accuser.

(心がやましければ責める人がなくても苦しむ) は、正常な心の持主であれば良心の苛責には耐えられないことを表わしていると言えよう。

しかし、一見するい諺もあることに気をつけたい。それは Never ask pardon before you are accused. (咎められないうちに赦しを乞うな) である。非難されてもいないのにあやまれば、みずからの口から悪事を暴露することになる、ということである。ことによると、夫婦、親子、恋人などおしの間などでは、ほか正直に過去の非行を口から出すことによって、かえって平和をかき乱すようなことがあるかもしれない。そういう時にこそこの諺は効力を發揮することになる。悪事の言い訳に The better (the) day, the better (the) deed. (日が良ければ、行いもそれだけ良いことになる) という諺を引き合いに出すことがある。神は地上を6日間で創造し、7日目に休息を取ったと言われる。このために6日間働いて1日は休まなければいけないとされている。この休息の1日がユダヤ教では土曜日、キリスト教では日曜日である。その日に働くのは罪深いことだと考へている信心深い人もいる。しかし、仕事によってはこの安息日にしなければいけないものもある。この日に働いているのをとがめられた時にこの諺を持ち出すこともあるが、悪事を働いた悪人は、週日よりも安息日にやる仕事のほうがりっぱであるとしてこの諺を悪用する。

言い訳となると、『聖書』の文句をも援用して、みずからの非をおおい隠そうとする。The devil can cite Scripture for his purpose. (悪魔でも自分の目的のた

めに『聖書』を引用できる) という諺は、シェイクスピアの *The Merchant of Venice* I. iii. 99 に由来する。悪事を隠そうとして聖句を引用する偽善者に対する非難のことばである。

The devil can cite Scripture for his purpose.
An evil soul producing holy witness,
Is like a villain with a smiling cheek,
A goodly apple rotten at the heart:
O, what a goodly outside falsehood hath!

(悪魔も聖書を引きあひにだす、手前勝手にな。ねぢけた心が、聖句を楯に使ふとは、それ、悪党の造り笑ひと同じこと、見かけだけで、しんは腐っている林檎みたいなものさ……なるほど、贋物たるもの、結構立派な外見をそなへてゐるものだな!——福田 恒存訳)

言い訳はしたらいいのか、わるいのかについて諺はあいまいである。一方において、Bad excuses are worse than none at all. (まずい言い訳は黙っているより悪い) という言い方で、へたな言い訳は信じられず嘘がばれるから、その結果、罪はさらに重くなる、としながら、他方において、A bad excuse [shift] is better than none (at all). (まずい言い訳〔ごまかし〕でもしないよりはまし) というのがあって、へたな言い訳でもしておけば失敗や過失に対する非難はやわらげられる、と言い訳をすすめる。言い訳をする人の心情を察した諺が、He who excuses himself accuses himself. (言い訳をする人は悪さをみずから責めている) である。フランス語の *Qui s'excuse, s'accuse.* の英訳である。「問うに落ちず(して)語るに落ちる」という日本語が思い出される。「理屈と膏薬はどこにでも付く」と言われる。言い訳はなんとでも付けてしまうのが悪人である。そういう悪人にかぎって The offender never pardons. (悪人は人をけっして寛大に扱わない) という諺で表わされるような態度を他人に対してはとる。もっとも無礼な者にかぎって人を赦すことを知らない。

Virtue is its own reward.

悪人には大物もいれば小物もいる。大悪もあれば小悪もある。犯した罪状に応じて罰が与えられているかといえばかならずしもそうではない。いつの世でも社会的不公正は厳然として存在する。法網をくぐって大罪を犯している者が安穏な生活を送り、人の上に君臨する場合もあり、ささいな悪に身を苛む者もいる。諺に One man may steal a horse, while another may not look over

the hedge. (馬を盗んでもいい人もいれば、垣根ごしに見てもいけない人もいる) というのがある。また、甚だしきにいたっては、The great thieves hang the little ones. (大泥棒がこそ泥を絞首台へ送っている) という諺さえある。大罪を犯しても罰せられない者がいるのに、小悪で咎められている人もいるというのが現実の世界かもしれない。

Desert and reward seldom keep company. (功績と報償は相伴うことはまれである) という諺は、善行に対する報いもまた不公平であり、ほめられるべき人が見過ごされたり、軽視されている場合が多いことを示している。Virtue is its [her] own reward. (善行はそれ自体が報いである) は、報いられないことに対する慰めのことばと解されてもしかたがない。善行の報いは、他人からほめられたり、報酬をもらったりすることではなく、善行をやったという満足感である、とこの諺をまっとうに解釈して満足できる人はそうぞらにいるものではない。そういう人が少ないからこそかえってこの諺の価値は高まるのである。『聖書』Matthew 6.3 には、But when thou doest alms, let not thy left hand know what thy right hand doeth. (あなたは施しをする場合、右の手のしていることを左の手に知らせるな) があり、2 Corinthians 9.7 には、Every man according as he purposeth in his heart, so let him give; not grudgingly, or of necessity; for God loveth a cheerful giver. (各自は惜しむ心からでなく、また、しいられてでもなく、自ら心で決めたとおりにすべきである。神は喜んで施す人を愛して下さるのである) とある。これらの『聖書』のことばを信じて、善行は黙々とやって満足すべきなのかもしれない。

Hell is paved with good intentions.

善人をないがしろにして、人間の惡しき面の代表である悪人を中心にして諺の世界を見てきたきらいがある。しかし、諺に登場するのは善人よりも悪人が多いのである。諺はネガティブに人間世界を見ようとする。諺を見ようとする者はネガを通してるべき姿の人間と世間を推しはかるべきである。

善人を真正面から見た諺に、The sun is never the worse for shining on a dunghill. (太陽はふんの山に輝いても少しも変わりはない) がある。善良な人は環境によって損なわれることはない、ということである。また、True blue will never stain. (眞の青色にはけっし)

(p.35へつづく)

FORUM



LET US WRITE ENGLISH ESSAYS

THE JAPANESE IDEOLOGY

TO INTRODUCE OUR COUNTRY

Susumu Kaieda

Professor
Meisei University

1

We Japanese do not write very much about our own country *in English*, because we have no confidence in writing ability. Young Japanese study English in junior and senior high schools and in universities — more than a third of senior high school graduates now go on to universities — and there are probably sixty thousand English teachers in Japan. Naturally the Japanese, particularly the younger generation, have a fairly correct knowledge of English, they know English grammar very well and are fairly good at translation, that is, translation from English into Japanese, but they cannot express themselves in the language. They hesitate to speak, still more to write, in imperfect English.

Many people of the world, I suppose, have interest in present-day Japan. They probably wonder how Japan, very small country as she is, has managed to westernize herself

and become one of the most highly industrialized nations in the world. How has she modernized herself in a short time, a hundred years more or less, after the collapse of her feudal system? What was the 'Meiji Restoration'? Many foreigners have indeed written about Japan — about the process of her modernization and about her strange manners and customs that have survived her westernization. But those foreigners' writings are after all secondhand information, and though they are quite interesting as writings showing the standpoints of outside observers, they are not always to the point and are sometimes even mistaken.

The world's people probably want to gain firsthand information about Japan; they are curious to know what the Japanese themselves have to say. The Japanese may not be good writers of English, and moreover, they may make mistakes just as foreigners do, in that they are unable to look at things objectively, but if many people of the world are more or less desirous of listening to what the Japanese have to say and some Japanese are able to express themselves in English, an international language, they ought to write about their country in the language and give firsthand information to foreigners, even though their English may be anything but perfect. (Since this is an international age and English is used on a world-wide scale, there are, and there should naturally be, a variety of English or English dialects.)

The writer is an English teacher in a Japanese university. He has taught English composition as well as grammar and translation for 46 years, chiefly in universities, and is going to furnish a sample of composition on his country written in Japanese or *Japanised* English.

2

The theme of the writer's composition is *The Japanese Ideology* — or *Japanese*

Ideas if the word *ideology* sounds somewhat pedantic. What kind of ideas or thoughts and feelings do ordinary Japanese people have? How different are Japanese ideas from those of other peoples? It is true human beings throughout the world have similar thoughts and feelings but in some points the ideas of one nation are usually different from those of another nation according to the stage of their political, economic, and cultural development. What are the peculiarities of Japanese ideas?

Suppose here is a typical Japanese young man named *Nakamura*, a very common name in Japan. He was born and bred in a Japanese village, finished his compulsory education, i.e. 6-year elementary school and 3-year junior high school course in the same village, entered a senior high school in a nearby town, and after finishing its 3-year course, came up to Tokyo, found a job in a large company and became a salaried man. In present-day Japan nearly 95 percent of the boys and girls who have finished their compulsory education enter senior high schools and more than one third of senior high school graduates go on to universities. *Nakamura*, as a typical Japanese young man, attended high school and on graduation, came up to Tokyo and became a salaried man.

The school education in present-day Japan is democratic; it is entirely different from what it used to be in the prewar days. *Nakamura* learned democratic morals, social studies, English, and so on, at school and like most other high school as well as university graduates, became the owner of a democratic ideology —— theoretically. But when he came back home from school, he was surrounded by indigenous feudal manners and customs and the ideas he learned at school were handicapped by old-fashioned Japanese ideas that had survived postwar democratization. His parents and older relatives and

neighbors were the owners of old ideas, though there were no more large landowners and obedient and servile tenants that had existed in his village in the prewar time. Ideologically there still remains a feudal atmosphere in any village in Japan.

Well, *Nakamura* has come up to Tokyo from his native village and become an employee in a large company. He has become a member of the company's labor union, too, and gradually learned to have more democratic ideas as a unionized worker. He now knows something of Marx-Leninism but though Japanese Marxists, like communists in Western Europe, are liberal enough to admit a good deal of 'bourgeois' elements and are trying to appeal to a large number of Japanese, he hesitates to listen to their appeal unconditionally. *Nakamura* is, after all, the owner of middle class ideas.

3

The company which employed *Nakamura* is a largescale company of a modern type. But the firm has some qualities such as are not probably found in most companies in the West. His company has a certain conservative atmosphere —— an 'order' —— peculiar to a Japanese business organization. Many, if not most, employees seem to be working, not for themselves or for their homes but for the sake of their company. Some employees actually say so, and in their attitude toward their company there is something that suggests the attitude of a retainer toward his master in the feudal times. There is a tie, a *warm* tie, between a boss and subordinate employees such as is not found in the labor union.

The Japanese who have succeeded in getting jobs with large firms rarely ever leave the companies; they work there till they reach the age limit. *Nakamura* will probably work in his company till he attains the age of 55 or nearly 60.

Nakamura is a typical modern Japanese;

he has ideas, half democratic and half feudal, since he has received postwar democratic education whereas he has lived in the semifeudal atmosphere of a Japanese village and is constantly working in a Japanese-type company in Tokyo. His ideology is a mixture of old and new ideas. Most Japanese people own ideas more or less similar to those of Nakamura's.

Japan used to be a feudal country a little more than a hundred years ago. Over 80 percent of the people were then illiterate peasants obedient to the ruling classes. With the 'Meiji Restoration' in 1868, however, they were emancipated from feudal fetters, but since the 'Restoration' was not a democratic revolution of a Western type, they were not wholly emancipated, many of them being no better off than before. Quite a

few of them became tenants under new landowners after the 'Restoration', and as Japanese industrialization proceeded, some of them came up to industrial towns and became factory workers, who were at first in as miserable a condition as their relatives in the country. There were control and guidance by the government, but there were little liberty and no democracy.

A democratic movement occurred in the Meiji era, and when Japan had reached the capitalist stage, a socialist movement took place late in the same era, and democratic reforms were certainly attempted, but it was only after World War II that Japan was wholly emancipated politically, economically and ideologically. Since a new Japan came into being only 30 years ago, however, she still retains lots of older elements.

英語教材案内 (II)

ELEC 出版部

OUR ENGLISH SONGS 1, 2

テキスト 各 ¥980, 教師用書 各 ¥1,600

カセット 各 ¥2,000, 1—全8巻, 2—全11巻

アメリカ・イギリスでよく歌われ、世界中にひろく知られている歌の中から英語を学ぶ日本人に必要な156曲を厳選。楽譜と美しいさし絵をふんだんに入れた楽しい歌集。

英語の対話演習 1, 2

テキスト 各 ¥860

カセット 各 ¥2,000, 1—全8巻, 2—全6巻
現代アメリカ英語の口語表現を駆使する応用力のマスターに最適。精選された対話を中心に、文型練習をはじめ多角的なドリルを含む。

ENGLISH YOU CAN USE 1, 2

テキスト 各 ¥980

カセット 各全2巻セット 各 ¥4,000

『絵で学ぶ英会話』、『英語の対話演習』に引き続き、

総合的な英語力の完成に最適の上級用英会話テキストの決定版。

SPEAK AND STUDY 1, 2

中島文雄監修/石川達朗編 各 ¥680

カセット 各 ¥2,000, 1—全8巻, 2—全5巻
英語の発表能力を育てるため、適量の対話をもとにして、英語の発想様式を徹底的にマスターさせる画期的なテキスト。LL用にも自習用にも最適。

ENGLISH PRONUNCIATION AND INTONATION DRILLS

Charles T. Scott 著 ¥580

カセット 全4巻 ¥8,000

日・英両語を比較研究し、日本での英語指導の経験を生かして執筆した、現代英語の発音・リズム・intonationをより正確にマスターするための中・上級向け発音教材。

●ご注文は最寄りの書店または当出版部へ。

101 東京都千代田区神田神保町3の8

電話 (03) 265-8911 振替東京 3-11798

『英語教育展望』

高橋 源次 著

ELEC 出版部刊, A5 判, 302 pp., ¥2,800

NIWASE TOSHI
庭瀬利男

はしがきの初めに「英語教育にたずさわること50年、この十数年に書いたものを一本にする。英語教育、英語教師論、国際会議、英語、わが思い出の5部からなっている。長短74篇の論文、隨筆、小品のたぐいである。いわば、ぼくの教育現場半世紀の体験であります。ぼくの軌跡でもあれば、vision でもある。『英語教育展望』と題するゆえんであります。」とある説明で本書の概略が伺えるが各部の主なものについて紹介してみたい。

■英語教育

英語教育のねらいは一口で言えば英語の実力をつけることであり、そのためには、教師の情熱、入試問題、3 M's 等考えなければならないことが多い。大事なことは about English ではなく、英語そのものを身につけること。そしてその根底に文化、英語の特性、生態文法等に対する洞察、認識をもつようすること。更に最近の英語教育の動向、これから英語教育の方向を把握する必要がある。

●英語教育のねらい……文化的環境、教授法等には変化があるが英語教授と学習の理念、人間完成の究極目標等にはそう変化はないとして、Palmer 博士のものを挙げているのは時代の推移を知る上からも参考になる。

1.~4. 省略

5. 会話、作文、文法と併行せざる訳読は片輪の変則的学習なること。それは真に英語を解し英文を味わうゆえんでないこと。理解・表現の両方面の学力をつけるべきこと。

●英語の実力とは……教養としての、又実用としての実力のこと。静的でなく、動的な学力である。

●実力養成……には中・高・大の一貫性、入試問題の改善、大学にも course of study を、Oral approach の推進、充実等が必要である。

●Oral approach について

1. 選択された語いを master させること。
2. 発音系統をのみこみ、ことばの流れ (the stream of speech) を理解すること。
3. oral practice に集中すること。
4. pattern を繰り返す oral approach が、終極において読解力のために必要な英語の構造を会得するのに、最も経済的な近道であること。
5. Oral Approach と Direct Method とは違う。

「Oral Approach においては、特に教授者の努力が望まれる。例えば Oral Approach の教材には、極めて詳細に亘って解説し、指導している Teacher's Guide が用意される。これは分量もかなりなもので、教師はこれをよく呑みこんで教室に出ねばならない。この点従来も、教師用指導書の類は用意されていたけれども、新教授法による Oral Approach において考えている程の guidance をその内容としていない。それでこれに取組む先生の勉強が、この approach の大前提である。…更にことばは体験と時間を必要とする。phonemic fluency が automatic habit になるのには、発音、抑揚の修正・克服に時間をかけねばならぬ。癪癖をおこしてはならぬ。先生の真似さえすればよいといえば、至極簡単のよう、仲々の辛棒が先生にも生徒にも期待されているのである。」

●英語教育には 3 M's (Man, Material, Method) が必要だが、方法、教材、人間三者の中、いちばん大事なのは人間である。

●文化について……文化は心の世界である。文明は生活環境である。物の世界である。文化は精神文明である。文化交流は優秀、非優秀の観念をすべてからねばならぬ。個性とか、独立性、個性といったものは、それ自体の価値をもっている。その尊い絶対的なものの交流である。

●生態文法について……英語を一つの生きた有機生体として見る。その生命の全体をつくりなしている部分部分の関係から始まって、それをとりまく社会環境にまで及んで、初めて英語の生態が分かる。英語の外側の研究——英語環境というか学際というか、こうした方面的研究。

生態文法の視点から英語教育のどの方面を重視したらよいか。……方法論としての 1. Recitation 2. Reading 3. Drama の 3 点。

●最近の英語教育の動向

1. 中学校の英語はオーラルを基本とする。
2. 実用英語の強調——英語は国際語。

3. 現場と書斎(研究)——書斎でつけた栄養をよく消化しながら現場(教えること)を第1に優先すべきである。

●今後の英語教育

1. 英語の国際性をもっと打ち出す。
2. 発表力を重視する。
3. 話し言葉としての英語を重視する。
4. 聴視覚教育の補助的性格と限界を知る。
5. よき教師になるよう努める。
(1)母国語を大事にする。 (2)理論や知識を出すのはずっと後の段階。 (3)率先垂範——修養、研究、工夫を怠らぬ。

■英語教師論

missされる人間になること。そして教師自身、率先垂範し、人間的に高まることが極めて大事である。「英語教師論」では、教師とは何か、英語の教師とは一体どういうものであるかを、語源的、国際的視野から述べており、読む度に、英語教師としての意欲と厳肅さを覚える。

●英語教師と率先垂範……知識の英語から体得の英語への切り替えには、生徒より以上に教師の方に革命的な努力を必要とする。…言語活動の率先垂範は理屈ではない。理屈である間は、活動ではない。

●教師の使命感……たえず反省して教師の立場を忘れず、学習者の立場を思うこと、教壇から降りること。現代社会に適応する人間の育成ということが英語教師の最後の目標である。英語の本を読むだけでは足りない。結局、教師は人間であることの根本にたちかえって、人間としての修養を積むこと、他の教科、人生、社会のこと、人間としての教養をもち、人間性の育成と発揚に努めること。

■国際会議

日米文化教育会議、世界語学会議、東南アジア英語教育研修会、アジア地域英語教育専門家会議等に参加、国際的視野から英語教育の充実強化、諸対策等を話し合い、potential young men の育成、cultural shock を与え合うことの必要性を痛感している。

■英語

会話練習の心得、英文修業10か条等著者の研修からにじみ出たものが述べられ、英語の特性については、男性的であり、温和さ、やわらかさがあり、flexible ながら自由の中に法則があるといった Jespersen やその他の学者の見方を紹介している。

■わが思い出

著者がどうして英語教師になったか、英語教師はどう

あるべきか、英語教師として何をしてきたか等について述べられているが、それらに対する解答は、著者が繰り返し述べている I like being a teacher of English で言い表わされていると思う。

著者の英語教育に対する情熱は60年前も今も変わりない。次のことは60年の経験からにじみ出たものである。

「Lifelong education は生涯研修にも通ずる。文化は完全の追求 (Mathew Arnold) である。教育も同じことで、それは学問の完成、人格の完成を追求するものである。」

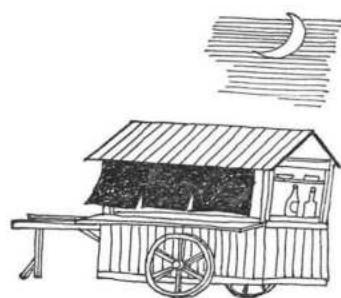
「初心忘るべからず、時々初心忘るべからず、老後初心忘るべからず。」

「英語というものは身につけるもの、理解でなくて実力である。英語を駆使するには訓練あるのみである。話すためには不断の読書と研究がなされるべき。生徒に勉強をせまるならば自らも、それ以上の勉強をしていなければならぬ。」

「勉強と研究の日が今も続いている。毎日のように辞典を引く。音読は日課としている。つい先日前にもこんなことがあった。Hornby 先生のお嬢さんが訪ねてくれて、自分の仕事は報道記者の仕事であるが、stringer もやっているという。ストリンガー、その単語は分らない。説明を聞くと、何でも随時記事を送る通信員のことである。あとで辞典をひいて意味をたしかめた。これなぞ多少専門用語の類であるが、こうしたごく普通の会話の中に出てくる単語でも、いまだに分らぬことがある。知らぬことを苦にしてはいけない。挑戦のつもりで取組んでいきたい。」

英語教育60年、今なお健在に活躍されている著者の姿が躍動していることばである。鼓舞激励され、教えられ、しかも自信と誇りと希望をもって、英語教育にまい進しようと思欲づけられることばである。全論文の到る所にこの気迫と教育愛が伺われる書である。

(旭川市立旭川第一小学校長)



『英語学と 英語教育をめぐって』

太田 朗 著
ELEC 出版部刊, A5 判, 322 pp., ¥2,800

ISSHIKI MASAKO
一色 マサ子

本書は英語学および英語教育にたずさわる人々の必読書だということを読み後強く感じました。らくな気持で読む人々には無意識のうちに教師として必要なものを与え、同時に、言語学・英語学を深く研究し、かつ、その応用に興味をもつ人々に対しても満足感と興味を与えることのできる不思議な書です。それは著者が権威ある学者でありながらも学を銜わず、よき教育者であり、余裕とユーモアの持主であることの証明だと言えましょう。

本書は著者が過去において種々の雑誌に寄稿したものの中から英語学と英語教育に関連したものを見出し、還暦記念として出版されたもので、内容は、論文隨筆等46篇で、これらが(I)「風物」、(II)「英語教育」、(III)「言語学・英語学」、(IV)「言語学者の横顔」の4項目に分類されています。

(I)の中の「未開拓の領域」では辞書に出ていない言語の感情的要素に関する研究の必要性を述べており、次の「現代アメリカ風物誌」には現代日本語に借入され定着している英語の借入当時の事情も興味深く記されています。あと2篇は、外国语の方言と言葉の変遷をテーマとした楽しい読物です。

(II)には「新しい言語観と外国语教育」、「わが家の英語教育」その他9篇があります。まず第1篇では、構造言語学の言語観とその応用としての教授法との関係を、適切な実例を示し、親切丁寧に、かつ簡明に説明しています。こういうことは、言語理論の深い研究と、それを応用面で生かすことを真剣に考える人でなければできない業と感銘させられ、英語教師には大いに参考になると思います。これにつづくのは講演其他の記録で、内容は、学校文法と科学文法の両立すべきことについて、教師の側から言って大切な面を述べ、Fries や Chomsky の理論を英語教育に応用する件については著者の感じる

ままを述べたあと、実際的に日本の英語教育に役立つ具体案を示した後、結局は折衷案への方向が常識的で一番よいように思われる結果になっています。全く同感です。最後の「入試採点を終わって」も、具体例をあげて、答案の批判をし、教師に一考させるものをもっています。

(III)には、「先生の一般教養」外17篇が含まれています。構造言語学から変形文法理論への動きにふれて、この何れに対しても熱狂的奉信者として終わるのではなくて、批判的にみることの大切さを納得のいくように解説しています。また Harris の考え方である「『共起』と『同じ n 個の組』」が、その弟子の Chomsky の変形文法のきっかけとなっているが、Chomsky の理論が急速に改訂されつつある時点においてもなお Harris の考え方方が何らかの形で生きつづけていることの妥当性を学問的に述べている有益で興味ある論文も含まれています。その他「機能的観点」、「焦点と前提」では、学界で大騒ぎをしている学者、それに追従していく人々の中にあって、私達は、理論的だけではなくて応用面からも考え、常に慎重な態度で向かうべきことを教えていますが、著者のこの見識には頭がさがります。また「前提の問題は、ただ動詞が叙実動詞か否かで単純にきめられるものではなく、一定の範囲の文脈で叙実性が發揮される」こと、また「それも動詞の種類により差がある」ことを述べ、研究に当たっての慎重さの必要性を教えている「叙実述語」もあります。この(III)の項目には「日英語の比較」も含まれていて、著者のこの方面の研究への動起が示されているのを読み、良心的な教師はこの道を辿らざるを得なくなることがよくわかり、楽しく思いました。なお2つの言語の比較に於て“異なっている点”ということは Palmer も言っており、それを更に Fries が大うつしにして強調したのですが、著者はもう一步先へ出て“同じ点も比べて考慮せねば”と言っているところに私は大賛成をします。真剣に、実際に仕事に取り組んでおれば誰もが必ずこれに考え方を知っていますので、更に著者は A 言語を柱として B 言語をそれにぶっつけて比較対照することにも言及していますが、これも大賛成です。私はその上に更に B 言語に A 言語をぶっつけて比較対照して、この両研究を整理してみることもよいと思います。大変複雑にはなりますがよき結果が出ると思い、それがもうはじめられてもよい頃だと思います。「日英語の比較——時制と相について——」は優れた研究論文の一つで、單文レベルで取り上げ、其の他の制限もつけての時制と相に関する日英語の比較ですが非常に

(p. 49 へつづく)

新刊紹介

■『現代英語文法—大学編』

R. クワーグ 著
S. グリーンバウム
池上 嘉彦訳

本書は *A University Grammar of English* (Longman, 1975) の訳書である。この文献は、今世紀最大の英文法書と言わわれている R. Quirk, S. Greenbaum, G. Leech, J. Svartvik 共著の *A Grammar of Contemporary English* (Longman, 1972) を主として英語専攻学生向きに縮約したものである。この縮約版編集に際しては、英語教育にも経験を積んだ英語学者が協力しているが、その中には、R. A. Close をはじめ、J. Algeo, M. A. G. Cerrudo, R. Filipović, J. Firbas, D. Girard, H. V. King, G. Nickel, W. Praeger, A. Rogers, A. Schoff があり、よりよいものとなっている。

筆者も Quirk 氏の依頼で縮約版の編集に協力したのは本書のような豊富な資料を新しい言語理論のわく組で整理したものが日本でも広く読まれることをかねがね希望していたからで、今度、立派な翻訳書として出版されたことを心から喜びたい。

原書には、かなり多くの新しい術語や概念が示されており、それらに適訳を与えることは極めて意義のあることと思う。拝見したかぎり、実際に明確な訳語が与えられており、原文ではむつかしい概念でも訳語のおかげで理解が助けられる箇所が少なくない。また訳語であいまい性がでそうな箇所は、上昇詞 (boosters), 論評節 (comment clause), 複項他

動詞 (complex transitive) などのように () 内に原文が示されている。この良心的な訳者の態度は参考文献の著書・論文の表題の全訳、二十余頁に及ぶ訳者解説、訳者による新たに 151 点の参考文献の追加にも見られる。訳者解説では各章の要点、最近の言語研究、学校文法との関係が興味深く述べられ、訳者の幅広い学識と着実な研究態度に印象づけられる。

なお、subjunctive を接続法と訳されているが、従来の仮定法でもよいと思うので、直接お伺いしたところ、すでに十数か所の修正・加筆する箇所に気付いておられるところで、なお一層よいものとなることを望みたい。

(紀伊国屋書店刊、A 5 判、785 pp.
¥ 3,500)

(筑波大学助教授 島岡 丘)

■『野球の英語』

山田 和男 著
吉井 徹郎

現在アメリカの言論界の大御所の観のある『ニューヨーク・タイムズ』のジェームス・レストランもスポーツライターとしての経験をもち、名文で鳴らしたボブ・コンシティンもスポーツライターとしても腕をふるった。アメリカの新聞記者にとってスポーツライターの経験は、サッカーリの経験と共に重要なものである。生き生きとした筆致で読者をひきつける文章を書くための、またとない修練の機会だからである。

したがって英語を勉強しようとする人にとってスポーツ記事は絶好の材料である。ムダのない書き方、うまい動詞の使い方などの見本がゴロゴロしているし、第一スポーツ好き

の人にとってより少ない努力で読み進むことの出来る対象である。

この『野球の英語』はそういう人たちにとって大へん助けになる本である。山田氏が10年あまりにわたって集めた各種の文例を内容別に分類しましたので、日本語でこう言うのを英語では何というのだろう、と調べるにはまさに好都合の本である。その意味では、英語で野球記事を書いてみたい、と思う人にとてより意味のある手引き書といえる。

同じ言い方も各種のサンプルがそろえてあって懇切だが、著者が集めたものの中に入っていない他の言い方もつけ加えてほしいものも目につく。例えば前進守備、という言い方は drawn-in infield しか出ていないが、他にも closed-in あるいは pulled-in infield と言う見出しがあるのに、stove league という対応する英語は見当らない。stove league という英語はあるのかないのか、読者としては知りたいところであろう。

しかし全般的に言って、豊富な文例をもつユニークな本である。

(文建書房刊、四六判、313 pp.
¥ 1,400)
(ジャパンタイムズ編集局長
羽仁 魁)

■『海外留学と英会話習得法』

九鬼 博著

海外、特にアメリカへの留学生は年々増加しているが、必ずしもその量に比例した質的成果をあげてはいないのが実状のようである。その一つの原因としては留学希望者に対する適切な案内書が意外に少な

(p.47よりつづき)

有益です。ある日本語論の書物で「日記の中の過去」というのを知りましたが、それを本書では、「現在・未来のことと、既に決まることの一部として覚えているべきだったのに忘れてしまったことを思い出した時」として、「明日は運動会があった」其の他をあげています。この方が前者よりもわかりやすいと思いました。また日本語の“だ”が英語の完了形に近いとしているところや、現在完了形(e.g. Johnは去年本をかいています)や、現在結果形(e.g. 先週は多くの人が死んでいる)等の説明も非常に有益です。「英語の動詞に関する国際会議に出席して」と「言語学のスペクトル」の中では、世界の言語学の権威と同席して対等に自然な態度で討議に参加し、自分自身を少しも意識しない著者の頗らしい日本人としての姿勢が彷彿とします。内容は簡単ではありますが、学問的動向を知り、色々の面から複雑な言語現象の実態を捉えたいと望む人々には深い興味を与えてくれます。

最後の項目は(IV)の「言語学者の横顔」で、Marckwardt, Bloch, Joos, Pike, Twaddell, Haugen, Fries, Chomsky等のお人柄、学風、業績と、これらの学者方と著者との関係で、敬愛の念のあふれる筆を運んでいます。日本の学者や教育者の学ぶべきことが沢山盛られており、これまた必読の項目です。私の個人的なことにも

く、基本的な情報と実践的なアドバイスが不足している点が考えられるが、本書は留学の文化的意義から説きおこし、いわゆる「英会話」を超えた英語の運用能力の上達法と留学の実際とを、実用的な着眼点から読者を勇気づける文体で詳述し、格好の案内書となっている。

第I部では、留学の目的を単なる語学修得におくことを批判して、学問修得におくべきであると主張し、それに必要な語学力を留学前につけておくことをすすめている。英語圏における学問修得の前提になる高度の英語力を持つためには、教えてもらって英語を修得しようといった受身の姿勢では達成できなくて、伝説的な語学修得者であるH.シュリーマンや閻口存男、あるいはかつての英学者たちのように外国語を攻め

なりますが、私も Fries, Marckwardt は恩師として、著者と似かよった特別なご恩を受け、深い感謝と敬愛の念をもっていますし、Twaddell は Fries の紹介で今でも親しく願っていますし、Haugen は Christophersen のおすすめでお会いしたこともあり、Pike は私がミシガンにいた年は外国におられたため教わっていませんが彼と Bloch と Joos は書物を通しての恩人というわけで、非常な親近感をもって(IV)を一息に読み終えました。これらの学者・教育者について読むだけでも、学問的に人間的にどんなに教えられるかわからないし、日本の教育者もこのようにあってほしいと切望しつつ大変な感銘をもって読了したことと、著者が隨所で、無言のうちに、日本の英語学者・英語教育者が、変動しつづけている学派の何れかの流行集団の中に没し去ってしまうないように、いましめていると強く感じたことを特記したいと思います。

取るに足らぬ誤植ですが気がついたのは次のものでした。

p.124 1.19. 「ありまい性」(→い)

p.219 2.2.2 (6) (b)...hare wa...(→k)

p.220 2.2.5 1.5. i^ru (→そろえること)

(津田塾大学名誉教授)

取る不屈の心構えと創造的な方法が不可欠であることを確認し、これら先人たちの語学上達法に加えて最近の言語学、外国語教授法の成果と著者独自の体験に基づいた英語修得法を紹介し、留学希望者はもちろん、それ以外の語学学習者に対しても語学修得のための貴重なヒントを提供している。ただし、TOEFL の得点についての記述は、不確かな点が見られるので訂正が必要であろう。

第II部は渡航手続きからアメリカの教育制度、学生生活の実態、科目登録、健康保険や食事等の留学生活から帰国後の注意にいたる問題点を、事務処理と文化的な適応の両面から手ぎわよく書いていて実際的なアメリカ留学の手引になっている。

(三修社刊、新書判、260pp.、¥950)

(ELEC 研修部 寺村 繁)



『エリセーエフの生涯——日本学の始祖』 倉田保雄著 新書判, 238頁, 400円 中央公論社

大村喜吉氏は『日本の英学 100年 昭和篇』の「後期概説」をこういう回想で始めている。「私はいまだに忘れることができない。あの米軍が日本陸軍に近接して来た日を。…矢つぎ早に彼らは私に質問してきた。『司令官はいらっしゃるですか』『参謀はいらっしゃるですか』『投降式のことへ参りました』これがみな立派な標準語の日本語である。私はこの時ほど敗戦のショックを受けたことはない。単に武力だけではない、『語学教育』という面でも、こちらは大きく負けていたのである。」

本書は、上記米占領軍将校たちを含む多くの日本研究家を育て、ハーバード大学東洋学研究所長としてアメリカにおける日本研究を隆盛に導いたエリセーエフの生涯を興味深いエピソードでつづり、あわせて「日本人の国際感覚」にも言及している。

『日本人 ユニークさの源泉』 グレゴリー・クラーク著, 村松増美訳 B6判, 292頁, 1,200円 サイマル出版会

これまでの、日本人の特異性に直接焦点を合わせた日本人論に疑問を持ち、むしろ日本人以外の人々がなぜ日本人と異なっているかという逆の問題設定から日本人の特異性を探り、エモーショナルで論理的には無原則な国民性の秘密を、イデオロギーを必要とする対外戦争が例外的な事件でしかなかった点に求めている。さらにその長所と欠点を、靖国神社と平和憲法の共存、新聞と週刊誌がタテマエとホンネを分担しているジャーナリズム、与えられた状況の中で局地的、一時的な思考に埋没する傾向などを例に解明している。

『アメリカの心 日本の心』 亀井俊介著 四六判 215頁, 1,200円 日本経済新聞社

これまでの日本人のアメリカ論が拝米と反米に分極化されている傾向を批判し、それを超えてより身近なものとしてより深く理解するための糸口としてアメリカの大衆文化を考察し、アメリカのヒーローたちに投影された一般的のアメリカ人の精神構造を考え、草の根のアメリカ文化を追求したエッセイ集。

『外国教科書の日本偏見 フジヤマ・ミカド・サムライ・ベン髪』 山田三雄著 B6判, 207頁, 1,200円 芙蓉書房

スイスといえば「平和」、インドといえば「カースト制度」といった外国のイメージは一般に浅薄な理（誤）

解に基づくものが多いが、その種の偏見を是正して正しい理解を深めるためには各国の外国についての地理・歴史の教科書が正しい記述である事が基本といえる。本書では、世界10か国の地理・歴史の教科書における日本の記述とヨーロッパ諸国相互の偏見の例を示し、歴史記述の難かしさ、そして外国理解の困難さと重要性を述べ、教科書とは何か、どうあるべきかという問題を提示している。

『英文の書き方事典 A Guide to Effective Writing』 三浦新市著 B6判, 340頁 2,000円 荒竹出版

これまで英作文といえば、「日本的な発想」の短い和文を与えて英訳させ、文法知識を試す傾向にあったといえる。本書は英作文を書き手と読み手とのコミュニケーションとしてとらえ、第I部では論旨の展開、文体の問題等の効果的な方法論を述べ、第II部「前置詞中心連語辞典」、第III部「主要語法辞典」は重要語句を例文と語法的注意とともに収集し、英文表現のための便利な「活用辞典」、「正用法辞典」となっている。

『論文＜リポート＞の考え方と書き方 実践的手びき』 滝川元男著 B6判, 116頁, 700円 南雲堂

アメリカの国語教育の比較で日本に欠けているのは作文教育であるとよくいわれる。本書は主観的な自分の考え方をリポートや論文として客観的な論理性を与え、説得力をもたせるための方法論と、句読点や引用文の扱いといった横書論文作成の常識をわかり易く述べ、代表的な英米作家の参考文献表をのせている。例文は著者の専門の現代アメリカ作家のものをとっているが、基本的な論文作成法を述べているので多くの人々に利用価値があるといえる。

『新言語学から英語教育へ』 佐々木昭／小泉保編 A5判, 302頁, 2,200円 大修館書店

構造言語学以後現在に至る言語研究の展望、変形文法の英語教育への応用の可能性、言語学の成果を英語教育に具体的にどう活用できるか、の3部構成から成り、それぞれできるだけわかり易く書かれてあり、英語教育関係者にとっての「変形文法入門」としても格好の書。

『英語科教育 基礎と臨床』 五島忠久／織田 稔著 A5判, 237頁, 1,500円 研究社

中学教科書に導入されている文法項目を、その基礎理論の詳述と、中学、高校の英語教師を交じえた指導上の実際についての討論とによって問題点を明確化させ、実践的なヒントを与える新しいタイプの英語教授法書。



展望 通信

◆「中学校学習指導要領」改定案に関する「要望書」の提出について

日本英語教育改善懇談会は去る6月19日に臨時懇談会を開催し、「中学校学習指導要領」の改定案の「英語」に関する内容について再度要望書を提出することを決定した、その概要は次の通りである。

1. 年間授業時数について

本懇談会は、前回の要望書において「中学校における年間授業時数は、各学年とも最低140とすること」と述べた。これに対し、学校教育法施行規則の改正案は、選択教科等に充てる授業時数を、第1学年105、第2学年105、第3学年140とし、さらに、外国語は各学年において105を標準とするとした。これは本懇談会としてはきわめて遺憾である。

「中学校学習指導要領」改定案は、その「指導計画の作成と各学年にわたる内容の取扱い」において、「聞くこと、話すこと、読むこと及び書くことについて調和を保つようすること」と述べている。このことを達成するには、日本語と語系を全く異なる英語の学習という視点から、十分な訓練時間の保障を最優先しなければならないことは論をまたない。学校教育法施行規則改正案に示す年間授業時数は、ますます「落ちこぼれ」を助長するものであり、まして「ゆとり」のある教育を目指することは到底不可能である。「英語」について、各学年とも最低140が保障されるよう強く要望する。

2. 学年別指定について

本懇談会は、前回の要望書において「中学校の文型、文法事項について、3年間に学習する基本的事項を示すにとどめ、学年別指定は行わないこと」と述べた。これに対し「中学校学習指導要領」改定案は、各学年の「2内容 (2)言語材料」で、「原則として、次の言語材料を用いて行わせる」としつつ学年別指定を行なっている。このことについて、本懇談会は遺憾の意を表明するものである。

改定案に「原則として」という表現が新たに加えられたことは十分に評価するが、「学年別指定は行わないこと」という要望に関連して、この「原則として」の精神

が広く一般に理解されるよう万全の措置がとられることを要望する。たとえば「指導書」において、この「原則として」の趣旨を解説する項を特に設け、言語材料の学年配当について、学習指導要領に示すものはカリキュラム編成のためのひとつの目安にすぎないということを明示するなどの措置をとることを要望する。

前回の要望書にも述べたとおり、文型、文法事項の配列にはいくつかの考え方があり、これを画一的に学年に配当して示すべきではない。

3. 語数および必修語の指定について

本懇談会は、前回の要望書において「語いについて、語数および中学校の語・連語の指定を行わないこと」と述べた。これに対し「中学校学習指導要領」改定案は、語数について、各学年とも300語から350語までとし、また、490の必修語を別表として指定した。ただし、連語の指定は削除された。

連語の指定の廃止は高く評価することができるが、語数および語の指定が依然として行われていることについては、本懇談会は遺憾の意を表明せざるを得ない。

これに関しては、「300語から350語までの新語」という表現について、また、490の必修語についても、前述の「原則として」の趣旨が及んでいることを、「指導書」その他において広く一般に理解されるように、明示し、強調することを要望する。

4. 「国際理解」について

現行の「中学校学習指導要領」では、その「目標」において、「国際理解の基礎をつちかう」ことを示している。これに対し改定案では「外国の人々の生活やものの見方について基礎的な理解を得させる」としている。

「外国の人々の生活やものの見方について基礎的な理解を得させる」ことは、「国際理解」の一部であって全体ではない。国際理解・国際連帯が強調されなければならない現在において、学習指導要領が国際理解の規模を縮少する方向を示すことについては、本懇談会は遺憾の意を表明するものである。

◆昭和52年度語学教育研究所大会

日時 10月22日(土), 23日(日) 午前9時受付

会場 武藏大学(練馬区豊玉上1-26)

日程 10月22日

午前：講演「児童文学と英語教育」

吉田新一(立教大学)

午後：授業実演 静岡県立吉田高校

10月23日

午前：協議会

第1「早期英語教育」第2「中学校新学

習指導要領批判とこれからの英語教育」
第3「視聴覚機器」第4「新教育課程に
よって高校英語はどう変わるか」第5
「共通一次テスト」

午後：講演

Paul G. La Forge (南山大学)

◆第13回 ELEC 英語教育研究大会

期 日 11月5日（土）

会 場 ELEC 会館（千代田区神田神保町3の8）

講 演 10:15—11:45

「海外から見た日本の英語教育」

今村茂男（ミシガン州立大学準教授）

授業実演 1:20—2:10

埼玉大学附属中学校3年生

指導者 埼玉大学附属中学校教諭

新島養平

研究討議 2:10—2:50

分科会 3:00—4:30

中学校部会・高等学校部会

詳細については英語教育協議会（電話03—265—8911）
に問い合わせられたい。

◆ELEC 月例公開講演会

ELEC 会館を会場としてつぎの通り月例公開講演会が
開催される。

日 時 10月15日（土）2:00—4:00

講演者 Daniel L. Gossman (マグローヒル・イン
ターナショナル, グループ・コンサルタン
ト)

◆第27回全英連東京大会

期日 11月12日（土）、13日（日）

会場 大妻女子大学（千代田区三番町12）

日程 11月12日

講演 比嘉正範（筑波大学教授）

John C. Condon (ICU教授)

授業実演 杉並区立松溪中学 吉田和彦、指導
講師 堀口俊一（東京学芸大学教授）／都立
千歳高校 喜久秀人、指導講師 高田久寿
(大正大学教授)

11月13日

分科会（午前）A. 中学の部 ①新指導要領を
どう生かすか ②学習評価 ③読むことの言
語活動 B. 高校の部 ①これからの文法指
導 ②英語科における Minimum Essentials
③現行指導要領の問題点と新指導要領 ④職
業科における英語指導 ⑤定時制・通信制課

程における英語指導 C. 共通の部 ①中・
高の連携 ②高・大の連携 ③What I
Learned in My Study Abroad ④English
Education in Schools ⑤教育機器の活用

パネルディスカッション（午後）「これからの
英語教育にのぞむ」國弘正雄（国際商科大学
教授）・益井重夫（国立教育研究所研究部長）
・天満美智子（津田塾大学教授）・佐伯彰一
(東京大学教授), 司会 大里忠(全英連会長)

参加費 3,000円

◆English Teaching Forum の配布

USIA 発行の英語教育専門誌 *English Teaching Forum*
の配布を ELEC が行なっております。購読料は年額
1,200円（含送料）。

最新刊号（1977年10月号）の内容は次のとおりであります。

“Understanding and Teaching the English Tense-
Aspect System” by M. Celce-Murcia

“Meeting Adult Students' Expectations for Spoken
English Classes” by D. Brown

“Designing a Reading Program for Advanced Students” by L. Groebel

“Auding' and Mother Goose” by T. Plaister

“American Light Verse : A Contemporary Selection”

“Mother Goose Rhymes : A Child's Literary Heritage”

* American Light Verse および Mother Goose の
レコード1枚つき。

◆原稿募集

『英語展望』では読者から原稿を募集しております。
内容・分量とも制限はありませんが、未発表のものに限り
ます。掲載分には規定の原稿料をお贈りいたします。

英語展望 (ELEC Bulletin)

第59号

定価 530円（送料 120円）

昭和52年10月1日 発行

◎編集人 中 島 文 雄

発行人 酒 井 杏 之 助

印刷所 大日本印刷株式会社

発行所 ELEC 出版部 (財団法人英語教育協議会)

東京都千代田区神田神保町3の8

電話 (265) 8911~8916

振替・東京 3-11798

ELEC

THE ENGLISH LANGUAGE EDUCATION COUNCIL, INC